

鳴門秘帖

剣山の巻

吉川英治

青空文庫

きつちよう
吉兆
きちうん
吉運

それから四、五十日の日が過ぎた。

暑い。

南国らしい暑さの夏！

雄大な雲の峰の下に、徳島の城下は、海の端はしに平たく見えて、瓦かわらも焼けるようなギラギラする陽ひに照らされている。

カチ、カチ、カチ！ たえまのない石工いしくの鑿のみのひびきが、炎天にもめげず、お城のほうから聞えてくる。町人の怠惰たいたを鞭むちうつようだ。

徳島城の出丸櫓は、もうあらかた工事ができている。今は、

いつか崩壊した石垣の修築が少し残っているばかり、元氣のい

い鑿のみの音は、そこで火を出しているひびきである。

あわのかみしげよし

阿波守重喜も、その後、めつきり快方に向つていた。

ひと頃、家臣たちが眉をひそめた、病的な乱らんぎよう行も止やまつて、

今では、神経衰弱のかけもない程、まつ黒に日にやけている。

あまたの若侍と一緒に、徳島城の大手から津田の浜へ、悍馬かんばを

とばしてゆく重喜の姿をよく見かける。

水馬、水泳、浜ではさかんな稽古である。ある時は、家中かちゆうを

あげて、陣練じんねり、兵船の櫓稽古やぐらげいこなどが行われた。

今日も阿波守は、水襦袢みずじゆばんに馬乗袴うまのりばかまをつけたりりしい姿で、

津田の浜のお茶屋に腰をすえ、生れ変つたような顔を潮風に磨か
せていた。

そして、白浪をあげて乗り廻している水馬の群れを眺めて、時
々、ニツコとさえしている。

健康とともに、強い希望の火が、かれの行く手によみがえつて
きていた。赫々かつかくとしてきた。

潮音、海風、すべて討幕とうぼくの声！ そう胸を衝うつのである。

炎日、灼土しやくど、すべて回天かいてんの熱！ そう感じられてくるので
ある。

健康な心には、迷信の棲すみうる闇はなかった。問者かんじやろう牢ろうのこと
も俵一八郎の死も、阿波守の脳裏からいつか駆逐されて、その後

には、ただ大きな望みだけが占めていた。

ことに。

もう五十日ほど前に、沼島の沖合で、法月弦之丞とお綱とが、暴風雨の狂瀾を目がけて身を躍らせたので、とうとう、それなり海のもくずになったであろうという三位卿の報告は、かれをして、ホツとした息をつかせたに違いない。

「幸先はよいぞ！」

阿波守の意気があがるとともに、出丸曲輪の工事は成り、石垣の普請は近く手を離れるばかり、火薬は硝薬庫にみち、兵船はそろい、家中の士気は揃ってくる。すべてが、不思議なほどトントン拍子に吉事を重ねてくる。

近くは、前もつて盟約のある京の代表者、徳大寺家の密使をはじめ、加担の西国大名、筑後の柳川、大洲の加藤、金森、鍋島、そのほかの藩から、それぞれの使者が徳島城に集まって、幕府討て！ 大義にくみせよ！ の最後にして最初の狼火をあげる謀しあわせをすることになっている。

で、阿波守の爽やかな胸から、時々、明るい笑いが頬へのぼる。波を見ては笑み、人を見ては笑み、馬を見ては笑む。

「阿波殿！」

と、お茶屋の端にかけている三位卿が、それを見て声をかけた。

「ウム、何か？」

「愉快でござりますな」

「心地よいの」

「若侍たちの水馬も、日に日に上達してまいります」

「蜂須賀武士じゃ！」

なんぼんてつ

「南蛮鉄ぐそくのような皮膚——」

「あれへ具足ぐそくを着込ませたら、よもや江戸の青ひよろけた侍どもにひけはとるまい」

といいながら阿波守、ふと、
有ありむら村のうしろにかがんでいる二人の見なれぬ侍に目をつけた。

「あれにいるのは何者か？」

と、重喜が妙な顔をした。

ひとりは頭巾をつけ、ひとりは総髪そうはつ。どちらも大名の前に出られる風姿なりではない。

「もと川島郷かわしまごうの原土はらし、関屋孫兵衛です」

と、待つていたように、有村がひきあわせた。

「ひとりは旅川周馬という浪人、一角にも劣らず、弦之丞を討つについて骨を折りました」

「ウム」

重喜は鷹揚おうようにうなずいた。

さきに、天堂一角から推拳があつたので、その名前だけは耳にしていた。

有村は、お言葉をたまわりたいと願った。そして、関屋孫兵衛

は、某所で果し合いをした折の刀かたなきず傷を病んでおるので、頭巾のままおゆるしを願いたいとつけ足した。これは、三位卿も真偽を知らないことだが、孫兵衛のいうままを取次いだのである。

で、機嫌のよい阿波守は、謁えつをゆるして、当座の手当を与えるように近侍きんじへいつけた。

納戸方の侍の手から、金一封ずつが渡された。

すくない金ではないらしい。

「なお、いずれ後日には、何かのお沙汰があるであろう」

ということに、周馬も孫兵衛も予期どおりなつぼへ来たわえと、内心ニタリとして、殊しゆしよう勝らしく引退った。

だが頭巾のことでは、さすがなお十夜も冷汗をかいたらしく、

腋わきの下を拭きながら、周馬とくすぐったがりながら、空いている
浜小屋のひとつへ入ってくる、とそこに天堂一角が、水襦じゆばん袷あはせに
馬乗袴ばかまの姿で、腕をくんで鬱ふさいでいた。

「お」と、顔を見あわせて、

「どうした」

と、肩を叩く。

「う……」と一角は元気がない。

「水馬で疲れたとみえる」

「そうでもない」

「今、阿波守に拝謁はいえつしてきた」

「ふーん……」

「貴公の推挙もあり、三位卿の口添えも利きいて、すっかり面目を
ほどこしたというわけさ」

「そうか」

「よろこんでくれ」

「うム」

「おれも川島へ帰つて、元の原土千石の身分になれる。周馬だつ
て、いずれ、近習とまではゆかなくつても、馬廻りやお納戸ぐら
いには役づくことになるだろう」

「早いな、話は」

「とにかく、吉運到来だよ」

「そうかしら」

「オイ、一角」

「え」

「そうかしらつて、お前めえだつて、噂うわさにきけば、たいそういい運が向いてきたというじやねエか」

「ウム、加増かぞうのお墨すみ付つきをいただいた」

「不足なのか」

「過分かぶんさ」

「じゃあ」

少し話がこじれてきた。周馬が代つて、

「おれたちが仕官したり帰参するのが気にいらぬのか」とひがんでいう。

「ばかをいえ！」

と一角は傲岸ごうがんになった。

「お互いに立身出世の緒いとぐち口がついたのを、誰が気にいらぬがある」

「それならよろこんでしかるべきじゃないか」

「だからよろこんでおるではないか」

「ちツ、まずい面つらをしているくせに」

「ほかに屈託くつたくがあるからだ」

「なんだ？」

「おれは少し気になってきた」

と一角はまた首をたれて考えこんでしまった。

「どうしたっていうんだ。天堂一角にも似合わん憂鬱じやないか。今、蜂須賀家もおれたちも、吉兆と吉運にめぐまれているのに」
「だからよ、その夢が凶く、裏切られてきやしないかと心配しているのだ」

「妙なことをいう……」

解げせない。

ふたりは眉をひそめて一角を見た。一角は何か真剣になつて苦念していた。

剽ひょう悍かん

で一徹者、何ごとにも荒けずりな性格を見せる天堂が、妙に楽しまぬ色で、考えこんでいるので、周馬と孫兵衛がだんだ

んたずねると、やっと、口を開いた。

「どうも、吾々の吉運到来は夢らしいぞ。夢はいいが、さめた後の悪さが思いやられる」

と、何かに、おびえていうのである。

「なぜ？」

「どうも、弦之丞とお綱は、まだ死んではおるまいと思われる。

もし、ふたたびかれが姿をあらわすことでもあつた日には、殿を欺だましたことになる」

「ばかな！」と周馬は一蹴して、

「あの怒濤どとうの中へおどりこんで、助かるわけがあるものか」

お十夜も同意した。

「一角、そりや、余りお前が考え過ぎるよ」と。

そして、もう一言ひとこと、冷笑をまぜてつけ加えた。

「運が向くと人間は臆病になる。金持になると病氣ばかり怖くなる、この夢がさめるな、この夢がさめるなつてやつよ。それと同じだ。ばかばかしい。夢といってしまえば、棺桶の底へあぐらを組むまでは、みんな夢じゃないか」

「くだらんことをしゃべってくれるな、拙者は心の底から心配しているのだ。恩賞の帰参のと、吉運に酔っている貴公たちを見るといつそう後が思いやられる。決して、根柢こんていもなく取越し苦勞をしているのではない」

「どうして急にそんなことを考えだしたのか。おれたちにはおか

しくってしようがない」

「実をいうと、拙者も、今しがたまでは得意だった。で、今日この浜で出会った叔父貴にも自慢をしたくらいなのだが」

「ウム」

「叔父というのは水泳指南番で、赤組頭、生島流の達

人で、平常は船預かりという役名で四百石いただいている、海

には苦勞をしている人間だ」

「成瀬銀左衛門のことではないか」

「そうだ」

「その成瀬に自慢をしたというのは、法月弦之丞のことをだな」

「刃で止めを刺したのではないが、とにかく、海の藻くずになっ

たことは分りきつておる。かたがたお墨付をいただいたから、それを話したのだ。さだめし、叔父にしても家中へ鼻が高かろうと思つて」

「なるほど、そしたら？」

「おめでたい奴じゃ！ 頭からそうどなられたものではないか」

「ふうむ、変り者だな」

「どうして、常識過ぎるくらいな常識家だ。その叔父が苦にりきつて、罵倒ばとうするのだから、拙者もちよつと面食らつた。——で理由を糺ただすと、法月弦之丞は決して死んではおるまい。必ずどこからか陸地へ上がっている！ 祝杯に酔ツぱらうなよ、阿波守様はいい時にはいい殿だが、悪い時にはその逆がひどく出るお方だぞ！

こう叱るのだ、拙者をな。で、だんだん叔父貴の説に耳をかし
てみると、どうも彼はまだ生きていたという結論になつてくる」

周馬もお十夜も、なんだか嫌な気持ちになつた。あまり正確な推
理がそのあとから出るのが怖ろしく思えた。

「深いことはいわれないが、叔父は水泳と船術の経験から、近海の
潮流に詳しい。また、みずから海へ飛びこんだ程の弦之丞だから、
必ず自信があつたろう。相当にいける者なら、あの晩の波ぐらい
は大したものではない。ことに隠密というものは、捕われるまで
も決して自殺をしないものだ、拷問ごうもんにたえ、恥をしのび、首を
斬られる最後の一瞬まで、生きて命をまつとうしようともがく粘ねば
り気のあるところに、隠密の本分と、かれらの誇りがある。その

辺はなみの武士のいわゆる最期の美とはよほど違う。だから、弦之丞も、お綱を引つ抱えて海へ入ったのは、おそらく、逃げるだけの自信があつてしたことに違いないし、船も阿波の沖へ近づいていたといえ、かたがた油断ゆだんはなるまいというのだ」

「けれど、もう五十日あまり過ぎた今日になつても、かれがどこに潜伏していたという知らせも、ないではないか」

「その代りに、かれの死骸がどこへ流れ着いたということも聞かない」

「そういえばそうだなア……」と周馬の声は溜息ためいきに似てきた。吉運到来の歡喜は苦もなくぐらつきだした。

そう疑いをもつてくると、弦之丞の変幻自在なことから推して

も、ヒョツとすると、徳島の城下あたりを澄まして歩いているよ
うな気がする。

下手をすれば、浜で動いている足軽や人足、お城に取ツついて
いる石工の仲間などに、かれが巧妙な変装をしていない限りもな
い。

「祝杯に酔っぱらうなよ！」

海で苦労をした人間がいったという言葉が、気味わるく耳にこ
びりついてきた。

阿波守が浜から帰城した後で、三人は思案にあまった顔を揃え、
三位卿にどうしたものか相談してみた。

「ふうム……」と聞いていたが、かれも専門家の成瀬銀左衛門が
いった説というのでは、頭から否定もしきれないで、

「そういわれてみると、ほうつてもおけぬな」

と、同じ疑念にとらわれてしまった。

そして、またこういった。

「なにしろ万全を尽くしておくに限る。それには、第一案も第二
案もあるから決して心配することはない」

翌日、かれは三名の者をつれて、すけとうまち 助任町の代官所に桐井角兵
べえ 衛をおとずれた。

「こういう者であるが」

と有村が、代官の角兵衛に示したのは、前夜、周馬が入念に描か

いた弦之丞とお綱の人相書で、骨格、年配、特徴、背丈せたけなどが、
微細にわたっている二枚の巻半紙。

それをひろげながら、

「今から五十三日前の暴風雨あらしの夜から後に、こういう男女の死骸
が、御領内の沿岸へ上がったことはないか。あるいは、無智の漁り
師よしなどが、曲者くせものに騙かたられて匿かくまっているような様子はないか、
また、巧みに変装して御城下などにまぎれ込んでおるようなこと
はあるまいか、どうか、入念に至急、お調べを願いたい」

と、むずかしい注文を持ちこんだ。

桐井角兵衛は罪人の揚屋あがりやを預かり、手代手先の下役を使って、
阿波全土の十手を支配している役儀上、いやとはいえないで、す

ぐに人相書を十数枚複写させ、それを美馬、海部、板野、三好などの各地の配下へ持たせて、しらみ潰しに各村を調べさせた一方、代官所の手先に命じて、城下はいうに及ばず、阿波の沿海、残るくまなく搜索させた。

叩けばほこりの道理で、その結果いろいろな報告が集まった。だが、ひとつとして取るに足るような手がかりはなかつた。

ただ、あの暴風雨あらしから数日の後、徳島より南の燧崎ひうちざきに、一枚の渋合羽が流れついたということと、まるで方角違いな、富岡郷かごうの山林の中に、日数をへた男女の死骸が抱き合つて朽ちていた、という二つの事実があつたが、それも深く探ってみると、いずれも縁のない暗合に過ぎない。

ふたりの消息は、依然として謎なぞであつた。求め得たものは、そういう偶然が起こさせる錯覚さつかくと、吉運をおびやかす疑惑、それだけである。

で、有村は、前から阿波守には内密に考えていた、第二の案を
実行しようとした。それを天堂や孫兵衛や周馬に打ち明けると、
三人も異議なく雷らいどう同した。

重喜しげよしに話せば、無論許されないときまっていることであつた。
許されないよりは或いは激怒をかうかもしれないと思つたので、
秘密に出立しようとなつた。

山支度！ できうる限りの軽装で、竹屋三位卿以下、夜にまぎ
れて城下を抜けだし、剣山へ指して行つた。

お十夜孫兵衛だけは、久しぶりで、途中郷土の川島郷へ立ち寄りたいたいというので、それより一日前に立っていた。そして、後の者を川島で待ちあわせ、そこで、何かの手筈を謀しあわせる約束。孫兵衛にしても木の股またから生れた男でない以上、川島へ帰つてみれば、古いさらぼうた祖父だとか、顔を知らない甥おいだとか、麦畑でねじ伏せた女だとか、古い記憶の中から彼を取りまくさまざまな人があつた。

だが。

故郷ふるさとへまわる六部ろくぶの気の弱り——で、お十夜がこの際すんかん寸閑すんかんをぬすんで、郷里をのぞいたことは、ようやくかれの放ほう縦じゆうな世渡りと、そぼろ助広の切れ味に、さびしい臺とうが立ってきたのを

語るものである。

「おれもこんどは落ちつくぜ。うム、御恩賞と扶持米ふちまいを大事に守つて、昔のとおり川島の原士はらしとなつて、この屋敷を建てなおすつもりだ」

周囲の者にも、こんな放浪児らしくない気持をもらした。

焼きが廻つたというものであるうか、それとも、人間らしいところへ落ちついてきたのであるうか、とにかく、吉運到来がだいぶどうもう獐やわら猛性を和やわらげているのは事実だ。

「おれだって、後生は安穩あんのんに送りてえからな」といったところが本音であらう。

そこへ有村が来てかれを誘い、一行四人、吉野川の上流へと急

いだ。

灼くやような陽ひが、かれらの笠の上から焦いりつけた。有村も一角

も、袴はかまの上から小袖を脱いで、白い肌着になつていた。柄つか頭がしら

の金具や刀の鏢つばも、手をふれると熱いほど焼けている。やがて仰

ぐ行く手の雲と雲の間に劍つるぎ山さんの姿がどつしりと沈んで見えた。

甲賀世阿弥こうがよあみのいる山だ。

全身の血とぎらん草の汁をしぼつて、かれが孜し々しと書き綴つづつて

いたものは、もうどの辺まで進んでいるか？

三位卿たちは世阿弥が最後の仕事として、そういうことに魂を打ちこんでいるとは夢にも知らなかった。だが、ぜひと、かれを殺してしまうことが、最善の手段だとは考えついていた。

いずれ、お綱は父に会うべく、また、弦之丞は世阿弥から阿波の内秘を聞きとるべく、剣山へ目指してくることは想像される。だから、その二人がかりに生きているものと仮定しても、先廻りして、世阿弥の命さえ奪^とつておけば、さまで驚くことはないではないか――。

こう有村は考えたのであつた。

そして、それを実行するために、四人は焼け土を踏んで剣山へ急ぐのだった。

へんろ
遍路の歌

鼬いたちのような鋭えいさをして、今朝けさ、堀裏町へいうちまちの横よこ丁ちようを出てきた
 手先てがみの眼八がんは、ツンのめるようになかつこうで、牢屋堀べいの下草したんへ痰たん
 つばを吐はきかけながら、そそくさと、代官屋敷しろやのほうへ急いいで行
 った。

それを見かけると、城下の者は、

「オヤ、何かまた朝ツぱらからお召捕めしとりがあるぜ、眼八が大股で
 行いった」

と、すぐに伝えあうほどな記録きろくを持っているすごい眼八。

手拭てぬぐいでふくれている懐中ふとこも、人一倍長い捕縄とりなわの束たばであアな
 っているのだらうと恐こわがられている手先である。

「お早はやう」

と、その眼八が門に立った。

黒い冠木門かぶきもんの外から中へ、玉砂利が奥ふかくしきつめてある。

城下代官と町奉行を兼ねている桐井角兵衛きりいかくべえの役宅だ。

ほうきほうきと打水で、役宅の前を掃除していた菖蒲革しょうぶがわの袴はかまと、尻はし

よりの折助おりすけが、

「やあ、眼八」

と、朝機嫌のいい声を出して、

「ばかに早いな、何かあるのか」

と、竹箒を肩に立てかけた。

「ウム、ちよつと」

「相変らず隼はやぶさだな、いずれ大物だろう」

「そうでもないが」

「町同心まちどうしんの田宮様たみやならば、もうあちらに詰めておいでになる、

取次いでやろうか」

「田宮さんじゃ、少し相談相手にならねエことなんだが、お奉行はまだ——」

「まだお住居すまいのほうだろうよ」

「折り入って眼八が申し上げたいことがあつて起き抜けにまいりましたと、ひとつ、取次いでみてくれないか」

「いいとも」と、菖蒲革しょうぶがわのほうが、役宅の横を廻つて、塀つづきの角兵衛の住居のほうへ様子を見に行つた。

待っている間、眼八と折助は、何かの話の末に思いだして、

「そーいやあ、森の屋敷の宅助はどうしたろう？」

と、眼八からいいだした。

「あいつにこまごまと積もつて、十両ばかりの貸かしがあるんだが」
「借金で首が廻らないところから、出先で随ずい徳とく寺じをきめてしまつたんじやあないか」

「だが、主人の啓之助も、まだ御城下には帰っていないらしい」
「噂によると、何かマズいことがあつて、大阪表でお扶ふ持ち放はなれとなつたそうだ」

「へエ、森啓之助が？」

「なんでも浪人したという話だ」

そこへさっきの菖蒲革が帰ってきて、

「眼八、やはりお役宅のほうで待っているとおっしゃったよ、すぐにお越しになるだろう」

「ありがとうございます」

と、およその時間を計りながら、そこで、二、三服煙草を吸つてから、役宅の奥へ入って行つた。

案内を知っている代官部屋を覗いてみると、桐井角兵衛はもう机に積み重ねてあるいろいろな書類をめくっている。それがみんなこの間うちから八郡の地方代官所へ問いあわせをした、人相書の反響かと思うと、眼八は、なんとなくおかしくつて、しばらく、苦笑を押えていた。

と、それに気がついて、

「眼八ではないか、早朝から折り入って話したいこととは何だな」と声をかけた。

「ごめんこうむります」

と、眼八は板縁にかしこまって、

「先日、竹屋三位卿のおいっつけで、ふれを廻しました法月弦之丞とお綱という女のことでございますが」

「ウ、ウム」と膝をのりだして——「今こんちよう朝も諸方から来てい

る書類に目を通していているのだが、ひとつとして確かくたる手がかりはない。ところで、何かそちの手で、めぼしいことが挙あったか」

「ちよつとばかり心当たりがございますので、それで、お指図をうけに上がりました」

と眼八は、煙管きせるを抜いて、指に挟んだが、煙草盆が遠いので、その手を空しくさせたまま、しばらく言葉を切っていた。

「ふうム……そうか！」

と桐井角兵衛は、机に山積している各地の郡奉行こおりぶぎようの報告よりは、眼八が、煙草入れの筒つつと一緒に抜いた心当たりという一句に、すっかり引きずり込まれて、

「して、その二人の生死は？」

と、まず、訊たずねた。

「奴らは、たしかに死んではおりません」

と眼八は、濁にごりのない声で、言いきった。

ゆうべ、手先の眼八は、免許町めんきよまちの刀研師大黒宗理かたなとぎし おおぐろそうりの店へ寄つて、ある兇行に使われた小柄こづかの目利めききをして貰つている間に、思いがけない拾いものにぶつかつた。

かみきりむし髪切虫のヒゲみたいに鋭いかれの感覚は、そこへ来た男と宗理の対話を二言三言ふたことみこと聞いただけで、

「こいつあ!!」

と、思った。

職業的な興奮を越こえて、一種の功名心に燃ゆる動悸どうきさえうつた。

この間うちから、阿波全土の代官や手先や町同心が、蚤取のみとりまな

眼こでたずねていても、なお、その生死すら判定しない法月弦之丞という江戸方の隠密と、お綱という女を、ひとつ、この眼八の

手で、アツサリ引つくくつてみたら、節穴同様な目玉をもつて納まつている町同心や郡奉行などが、どんな面つらをするだろうか？

思ってみるだけでも痛快だ。乗り気になる値あたがある。

で、眼八。

その男が帰ったあとで、何食わぬ顔をして、宗理の口うらをひいて家へ戻つてきた。

寢床の中で、とつくりと前後のことを綜合してみると、やはり弦之丞もお綱も立派に阿波へ入つて、どこかにほとぼりをさまして、いるという結論が生れてくる。

眼八は寝られなかつた。

当たつた富とみ札ふだをふり廻しているような興奮で一世一代の仕事

だと考えた。初めは直接に三位卿のところへ持ち込んで、城内で羽振はぶりのきく若公卿に取り入ろうと胸算むなざんをとつたが、それもあまり支配者を出しぬく形になるので、とにかく蒼惶そうこうとして起き抜けに代官屋敷へやってきたわけ。

それは桐井角兵衛にも寝耳にも水であつた。

「で、お前がいた時に、大黒宗理の所へ来あわせた男というのは、いったい、何者なのだ？ まさか弦之丞自身ではあるまい」

「そうです、無論弦之丞てまつりやありません、どこかこの辺の浜へ稼ぎに来ていた船大工の手間取てまつり。そいつが研師とぎしの宗理の手から、研とぎ上がった二本の刀を受け取って帰って行きました」

「船大工が？」

「へエ、しかし、ひとつは、無銘の長い刀、ひとつは新藤五とい
う小脇差で、すばらしい名作、鑿のみや手ちような斧なら知らないこと、船
大工風情の手にある代物しろものでないことは分っています。で、頼み
主はと台帳を見て貰うと、海部かいふの日和佐ひわさしゆくの宿、大勘だいかんという棟
梁ようの名になっています」

「ふム、そして？」

「頼み人たのの名に偽りのないことは、品物が大事な金目のものだけ
に、まあ、嘘はないと見ておきました。それに日和佐の宿あたり
には、それ程の刀を研ぐ腕との研師はありますまいから、わざわざ
徳島の城下まで持ってきたに違いありません。ことに、その刀も
ただの研とぎではなく、潮水浸しおびたしになったのを、鞆さや、柄糸つかいと、拭上ぬぐいあ

げまですっかり手入れをしなおしたもので、宗理の手もとでも五日ほどかかったという話。——指を繰ってみると、ちようど沼島沖しまで四国屋の船が暴風しげをくった日から四、五日後に持ちこんだ勘定になるんです」

「なるほど」

と、角兵衛もうなずいたが、

「だが、それだけの事実を押し、双腰ふたこしの刀を、弦之丞の持物であると断じるのは早計ではないか」

「そこにや、動かない証拠があるんです。というなあ、無銘の方のこづか小柄には、弦之丞しるしの印と聞いた三日月紋の切銘きりめいがあり、もう一腰の新藤五の古い鞆さやには、甲賀世阿弥よあみという細字さいじが沈金彫ちんきんぼりに

埋めこんでありました。で、もうこれ以上の詮索せんさくは無用でしょう。すぐに使いの男をつけて、その場から日和佐ひわさへ突ツ走つてもいいところですが、大事を取つて一応ご相談に上がったわけです」

「ウーム、そうか」

桐井角兵衛にも、もう少しも疑う余地がなかった。

「日和佐の宿に潜伏せんぷくして、刀の手入れのできるのを待っているものとみえる」

「それと、これにや弦之丞をかくまっている奴が、ありそうですから、ただいきなり捕手をくりだしても、風を食らってしまうでしょう」

「とにかく、何より先に、このことを、有村卿きょうのお耳に入れて、

お指図をうけた後の手配とするが順序であろう」

「あれが仕上がって届いたとすると、弦之丞はすぐにも日和佐にいないかもしれません。どうか、ご相談に暇どって、大事な機おりをはずさないようお願いいたします」

にわかそうこうに蒼惶とした気持で、桐井角兵衛は使いをもつて、このことを城内の三位卿に知らせてやると、その有村は、きのう山支度をして、かねて望んでいた剣山の踏破に出かけてしまったという返辞。

「あれほど役人の手を騒がしておきながら」

と、かれの腹ふくぞう蔵を知らない桐井角兵衛は、三位卿の行動を不快に思ったが、みすみす眼八がつきとめてきたものを、悠々と、

有村の帰りを待つてはいられないので、かれは彼の独断で、日和佐へ手配することにきめた。

手先の眼八はわらじをはいた。

足は自慢な男である。

城下から海ぞいに、土佐街道を南へ十四里ばかり、日和佐の宿へ急いだのだ。

磯の香の高い海^{うみべまち}辺町にはいつた晩、かれの姿は、すぐと、海^か部^{いふ}代官所の中へ消えていた。

で、何かの手筈はその晩にすんだとみえて、翌日になると眼八、旅職人の風^{ふう}つきで、わざと間のぬけた顔をしながら、厄^{やくよけ}除橋^{ばし}の

辺をウロついていた。

薄暮の海が眺められた。漁港らしい灯が日和佐川に映っている。
宿しゆくの中を通っている街道には、ひとしきり荷駄にだの鈴や、宿引きの
女の声や、さまざまな旅人の影が織っていた。

四国二十三番の札ふだしよ所やくおうじ薬王寺にゆく足だまりにもなるので、
遍路へんろの人のほの白い姿しろと、あわれにふる鈴の音ねもこのたそがれの
わびしい点景。

「あ、こちら様だナ」

と、やっと見つかったというふうには、眼八、とある角かどがま構えの
格子先に腰をのばした。

船ふなだままつ玉祀りの御幣柱ごへいばしらが、廂ひさしの裏に掛けわたしてあり、荒格子

に三間土間げんどま、雑多な履物が上げ潮でよせられたほど脱いである。

櫓げやきの板に「大勘だいかん」と書いて、表に打つてある標札しるしをたしかめ

ながら——実は海部代官所で所も内状も調べてきてはいるのだが——どこまでも不案内の渡り者らしく装つて、

「大勘……ウム、大勘、こちらの親方に違いない」

とつぶやきながら荒格子をあけ、畏る畏る、おそ

「ごめんなすツて」

と、上がりがまち框へ腰をかがめた。

部屋にいる手間取か内弟子か分らないが、いけぞんぎいな若いのが出てきて、

「なんだい」と見下ろした。

「旅たび人でございます。親方のお名前を承知しまして、お頼り申してまいりました」

「同職か」

「へエ」

「上あがンねエ」

「ありがとうございます」

「裏へ廻ると井戸がある。その側に小屋があるから、そこでゆつくり泊つてゆくがいい。朝立つ時にやちよつと俺たちの部屋へ声をかけて行きな、わらじ銭と午ひるめし飯だけは饞せんべつ別してやることになつているんだから」

「ご厄介になります」

格子を出て裏へ廻った。

路次の横に窓があつた。すだれ越しにチラと見ると、羅漢らかんのよ
うな裸ぞろいが、よからぬ弄戯あそびに耽ふけっている。

同職の渡り者といえ、宿なし犬に縁の下を貸すくらいな気安
さで泊めてはくれるが、ちやんとあしらいの寸法がきまつていて、
何ひとつ道具のない部屋で、塗ぬりの剥はげた箱膳はこぜんに、沢庵たくあん四き
れ、汁一椀わん、野菜の煮しめが一皿ついて、あたりに人はなしとい
えども、それをあぐらで食うわけにはいかない。

禅僧のように、椀や皿の残り汁まで、きれいに湯で洗つて飲ん
で、きちんと隅へ下げておく。一椀の恩に対する作法である。

そこへ中年の小僧が、

「客人、すんだかい」と膳をさげに来て、

「蒲団ふとんと行燈あんどんは、その板戸をあけると中にあるから勝手に出し

てくんな。油があつたかしら、油壺を見てくンないか、客人」

「ごぎいます、どうもご馳走様で」

「そうか、じゃお寝やすみ」

「もし、もし。ちよつとお待ちなすつて」

「何か用かね」

「親方にご挨拶をしたいと存じますから、ひとつお取次ぎを願います」

「親方はいないよ、この間うちから留守なんだ」

「じゃお内儀かみさんか誰か、お身内の方に、ちよつと会わせて貰え

ませんでしょうか」

「お内儀さんは近所の衆と、へんろ遍路に出て今は留守だし、ほかにや弟子か部屋の者ばかりだが、何か用かい、客人」

「ナニ、別段なことじゃございませぬけれど……じゃ、お前さんに伺つてみますが、誰か、この家に商売違いなお客が二人ほど、お世話になつちやあいませんかね？」

「商売ちがいな？」

「若い男と女です」

「いねエなあ、そんな者は」

「いませんか……」と眼八が、ダメを押ししてひたいご額越しに相手を見つめた。ひよいと、その眼光りが変わったのを自分でも気がついて、

「へ、へ、へ、へ。まことに、妙なことをきくようですが、私の身寄りの者で、今は、大勘さんの家にお世話になつていふというような噂を、ちよつとよそで聞いたもんですからね……それで、何ですが……じゃ、そんな方はおりませんか？」

「いつ頃のことだい、それやあ」

「さようで……」

と、額に平掌ひらてをあてて、わざと考えるふうを装よそおいながら、にわかあにきに、思ひだしたように、鼻紙へ一分銀を一ツ包んだ。

「兄哥あにき、これやホンの少しだけけれど」

「いらねエや、お前は旅人たびにんじゃないか。旅人からそんな物を貰うと、部屋の者に叱めえられら」

「なアに、誰がそんなことをしやべるもんですか、まア取つとい
ておくんなさい、私だつてこうしてお世話になれば、旅籠賃はたごちんと
いうものが助かっているんですから……。エーところで、その若
い男と女の客が、多分、こちらへ来たろうと思うのが、そうす
ネ、今から五十日前の前後か、それから後のことなんです、よ
く考えてみておくんなさい、きつと、お心当たりがあるでしょう」

「ああ、そうか……」

「知っているね！」

と眼八、一分銀を握らせたその腕くびをギュツとつかんで、
「それごらんなせえ、やっぱり、お前さんが忘れていたんだ」

眼八の誘いにツリこまれて、大勘の内弟子は、うっかり、

「ア、そういえばネ、客人」

と、しやべりだした。

「似た話があるぜ」

「ある？ ふム」

「もう一月あまりも前なんで、すっかり忘れていたけれど、ちようど、客人のいつた頃にあたるよ。小雨がソボソボ降っていた、^{しけ}暴風あがりからズツと降り通しで、部屋の者も仕事がなしで、早く床についた晩なのさ」

へたな言葉をさし挟んで、相手のしやべる^ず図をはずすまいと、眼八、大事そうにソツとひとつうなずいた。

「……とネ、宵の五刻いつつごろ、トントンと表をたたく人があるんだ。おらあ親方の瘤こぶみたいな肩を揉もませられていたので、イイ機しおだと思つたから、親方、誰か表に客人でございますヨ、そういつて顔を覗のぞくと、ふム、分つているとうなずいて、部屋の奴アみんな寝たか、とこう聞くんでございます」

「なるほど」

「へエというと、親方は、いずれ今頃ウロついてくる客は、旅人だろうから、あつちの小屋へ行あんどん燈を入れておけ、そして、後はおれが見てやるから、てめえは床に着くがイイ。そんな優しい親方でもないのに、妙だナと思いなながら、いわれた通り——今お前さんのいるこの部屋へ灯を入れてみると、そこへ親方が、ふたり

の客を外からここへ案内してきました」

「ふたり？」

「エエ、ふたりです。しかも、頭から酒さか菰ごもをかぶって、まるで乞食こじきのような風態をしているのに、親方はばかに親切に世話をしていました。すると、てめえはあっちへ行つて寝ろといわれたので、そのまま、母屋おもやのほうへ戻りながら、井戸端で足を洗っているお菰ごもを見ると、とても、白い足をしているんで、オヤ、とその時気がつきました。ひとりのほうは、ゾツとするようないい女、ひとりは五分月さかやき代の若い浪人者です」

しめた！ と眼八は、腹の中で雀躍こおどりしていた。

なお、さあらぬふうで、言葉巧みに聞き出してみると、その晩、

ここへ泊った素姓の知れない男女ふたりは、翌朝、部屋の者が眼をさました時分には、もうどこかへ立ち去つていて、誰も知らないくらいであつたという話。

「そうでしたか、それでおよその事情が分りました。イヤ、大きおおにありがとう」

眼八はていねいにこういつてから、自分の振ふり分わけを解いて、

「うるさいことをきいてすみませんが、ついでに、もうひとつお伺いしたいと存じますが……」荷物の中から取り出した澁紙の端をほぐすと、コロコロと一本の鑿のみがころがりだした。

商売道具。

「平鑿ひらのみだネ」

と、すぐに向うも目をつけた。

「エ、なかなかよく使いこんである鑿のみです」

「売るつもりなら部屋の者に見せてあげるぜ」

「なに、これは、手放すわけにはゆかない品なんで」

と、眼八、のみの平首に拇おやゆび指を当てて、ピカリと、ひとつ引
つくり返した。

「これや、私が徳島の城下はずれで、フイと拾った物なんです。

落し主は、こちらの半はんでん纏まとをきいている若い棟とうりよう梁はり、うしろから

声をかけましたが、ツイ見失って、そのまま、いつかついでがあ
つたらと、振分の中へまるめ込んでおきましたか、ここに……」

と、鑿のみを眼のそばへ寄せて——「源という字が片かた彫ぼりしてあるが、

こちらのお職人で、そういう頭字かしらじのつく人がおりましたよかね」

「源？ ……じゃ源次のことかもしれない」

「じかにお渡しいたしたいと思いますが、ちよつと、耳へ入れて上げてくれませんか」

「いいとも、じゃア今ここへ連れてくるから」

と、大勘の中年者は、膳てのひらを掌へのせて母屋のほうへ戻つた。

眼八は拇指の腹であご髯ひげをコスリながら、畳へおいた平鑿ひらのみを見つめておつた。

何かのクサビになるだろうと、この間、研師とぎし大黒宗理の店さきで、そこにいた職人の道具箱からソツと一本かすめておいた品物だ。

「この鑿を持っている源次という職人を取ツちめてみれば、大黒宗理のところから受け取って行つた刀を、どこへ届けたか分つてくる。そいつさえ当たりがつけば、もうしめたものだが……」と、息を殺していると、

「ここか」と、外で職人らしい声がした。

「客人」

と、前の中年者が顔を出して、

「聞いてみたら、やっぱり鑿を失くしたのは部屋の源次という人だった」

「ア、それやどうも、お世話様で」

「先でも、使い馴れていた稼業道具を失くして、困っていたと

ころなんで、話してやったら大よろこびさ。で、今ここへ連れてきたからね」

「そうですか」

と、片手をついて身をねじりながら、

「源次さんとおっしやるのは？ ……」

と、土間の外を見ると、まぎれもなく、この間、宗理の店から、弦之丞とお綱の刀をうけ取って帰った、あの若い男である。

失くしたとばかり思っていた道具が手に戻って、大工の源次は、わけは知らずに礼をい^{しるし}った。

「近づきの印^{しるし}に、どこかで一^{ひとつくち}杯やろうじゃねエか」

どつちから誘うでもなく、涼み半分、ぶらりと、連れ立って飲みに出かける。

眼八には思う壺^{つぼ}。

「不案内でございますから」

と、ついて行つた。

源次は礼におごるつもりなので、町の西端れの馴染^{なじ}みの家へ案内した。だが、その払いも眼八が先に越して、

「どうせ、今から部屋へ帰つても、この暑さじゃ寝つかれやしません。少し、どこかで涼んで行こうじゃありませんか」

と、厄除^{やくよけ}薬師の石段を上りかける。

「上へあがってみなせエ、寒いようだから」

同職と思つて、源次はすっかり気をゆるめているらしい。だが腹の底はしまった男とみえて、飲屋で話しあっている間に眼八がチヨイチヨイかまを試みたが、いっこう、口をすべ込らせてこなかつた。

で、かれは、少し業が煮えていた。

どこかで睨みの利くところを見せて泥を吐かせてしまおう胸算。足場ばかり見廻している。

山は医王山の幽翠を背負つて、閑古鳥でも啼きそうにさびていた。

厄年の男女がふめば厄難をはらうという、四十二段、三十三段の石段を上ると、日和佐川のはけ口から、弧をえがいている磯

の白浪、ひと目のうちだ。

明鏡のような夏の月が、荒海から天へ洗い上げられている。

うろこ雲の徐々とした歩みに、月光が変るにつれ、海もたえず
明暗の変化を見せていた。その、冴えきつた一瞬には、すいてんほう水天
髣髴ふつの境、紀きの路じの山が、ありやなしやに見えている。

「エエ、気味のいい風だ」

と汗をひそめて、眼八は境内の捨石へ腰をすえ、

「なるほど、ここはいい所だ」といった。

眺めのいい所という意味と、源次をひっぱたくにはいいお白洲しろす
だという二様の意味にとれる。

「夏知らずというところさ、あつしやあ、きのう昨日もここでウツトリ

ととしてしまった」

「昨日？」

と、眼八は、すぐに揚あげ足あしをとつて、

「きのうは浜へ仕事に行つたと言いなすつたが」

「なに、ちよつとこの辺へ使いがあつてね」

「おととい昨日はたしか徳島になすつた」

「エエ、親方の代りに、新造船しんぞうの絵図をとりに行つて、歸りに、

御城下を少しブラついてきた」と、源次もそこで鑿のみをなくしたという事実があるので、これだけは隠されなかつた。

ようし！ この辺からソロソロ締しめぎ木を責めてやろうか。

眼八はそう思いながら、

「源さん、まア掛けねえな」と、煙管きせるの先で、杉の木の根あがり
を指した。

「御輿みこしをすえると、眠くなるからなあ」

「眠くならねエようにしてやるから、とにかく、そこへ落ちつき
ねえ」

「いやだぜ、悪い喉のどなんかを聞かせちや」

「いいやな、お前めえ、ここは四国二十三番の札ふだしよ所だ、御詠歌ごえいかぐら
いはおつとめしなくつちや、靈地へ対して申しわけがない。そこ
でぼつぼつ始めるが……オイ、源次ツ」

と、肩を突ツ張つて、にわかにわかに鋭鋭くなった。

「なんだ、旅人」

と源次はあツ氣にとられた顔をした。

「お前は何か、先刻おれが返してやった平鑿ひらのみを、徳島のどこでなくしたか気がついてるか？」

「冗談いうない、落した所を知っているくらいなら、何も、わざわざ他人ひとに拾われやしねえ」

「そうだろう。じゃ教えてやるが、実は、あれや御城下の刀研ぎと、おおぐろそつり大黒宗理の店先で、お前が頼み刀ものをうけ取っている間に、道具箱からぬけだしていたんだ。なにも、平鑿に足が生えたわけじゃねえから、無論、おれの指先が、黙ってお預かりと出かけたんだが……」

源次は静かに顔色をかえていた。

その時、宗理の店で、背中合せに掛けていた男の姿を思い浮かべて、かれは、しまった！ と臍ほそをかんでいるらしかった。

眼八は相手の眸ひとみを読みながら、

「オイオイ、駄目だ駄目だ、逃げようたつて逃がしやあしねえ。

徳島奉行の御配下で、釘くぎぬ抜きの眼八といわれている鬼手おにてきぎ先だ。

その釘くぎぬ抜きが噛みついてしまった以上は、めつたにここをズラからすものか」

「野郎！」

と、源次は片足ひいて、

「じやてめえは、旅人といっていたが、徳島から潜もぐりこんできやがった岡おかツ引だな！」

「神妙にしろッ」

「やかましいやいッ」

手拭にくるんでいた平鑿が、風を切って眼八の脳天に跳びかかってきた。

「ふぎけやがって！」と、眼八は身をねじって、鑿の腕くびを引っつかみ、デンと投げ業わざをかけたが利かず、腰をくだいて、ふたつの体、よじれながら横ざまにぶっ倒れた。

「ちイツ……この野郎」

「御用だ……御ツ……御用」

と、組んず、ほぐれつ。

龍姿りゆうしの松をすく月の斑ふに、ここを必死に、キラめき合う鑿と

十手。

月光の下に、黒いふたつの体、ややしばらくというものと、
月光の下に、黒いふたつの体、ややしばらくというもの、
と、上になり下になってよじれ合っている。

と。

下に組み伏せられたと見えた眼八、足業あしわざにかけて、相手の胴
を万力まんりきのように締めつけ、源次が、

「うツ」

と、気を遠くしたのを見すまして、

「骨を折らしやアがった」

と、起きかえって、側を離れてくると、その手と源次の間に、

いつのまにかタランと、捕縄とりなわがつながれている。

源次はもう抵抗しなかつた。肘ひじで、やっと体を起こしながら、縛られている自分の手へ眼を落したままうつむいている。

「ばかな奴だ」

と、月に光っている足もとの鑿のみを遠くの方へ蹴とばして、眼八、捕縄の端を三尺ばかり垂らして持った。

「名うてな釘抜きだといひ聞かせているのに、ムダなあがきをしやがって、ふざけた野郎だ。さッ、お白洲しらすだぞ、世話をやかせず

に、泥を吐かねえと、捕縄の端の鉛なまりだま玉が横ツ面へ飛んで行くからそう思えッ」

と、凄味を加えた言葉つきで、右腕の袖をつまみあげた。

「——おととい昨日の晩、てめえが大黒宗理の所から持つて歸つた刀、一本は無銘の長い刀、やつ一本は新藤五国光だ。しんとう宗理の店の研とぎも物の台帳から、ちゃんと洗いあげてあるンだから、いい遁のがれはかなわねえ。あの双腰ふたこしを、てめえいつたいどこへ届けてやつたのか、まず、それからひとつ訊きこうじゃねえか」

「……おれに訊いたつて無駄だからよしてくれ、源次は口が固いと見込まれて、親方から固く頼まれてしたこと、代官所へシヨツ曳そろばんかれたつて、算盤ゴザへ坐らせられたつて、決して口を開あきやしねエから」

「ふん……面白い」

と、あざ笑つて、

「てめえがそういう男なら、眼八の釘抜き根性も、いつそう脂あぶらがのつてくるというもんだ。腕によりをかけても、その口を開かしてやるから見ていろいろツ。おうツ、吐ぬかさねえか」

ブランと提さげていた縄の端で、荷馬にうまの尻をなぐるように、いきなり二ツ三ツ源次の頬を見舞った。

「さッ、申し上げちまえッ。あの双腰を誰に届けてやった！ いや、その届け主は読めている、場所をいえ、隠れ場所を！」

「そんなことまでおれは知らねえ」

「ナニ、知らねえ！」

「知らねえ！ おらあ、そんな深いことまで知つちやいねえ」

「甘く見るなッ」とまたひとつ、鉛玉をビュツとうならせて、源

次の顔に血を吹かせた。

「ア痛ツ……」

「いてえか！」

「し、知らねえものを」

「野郎」

と、土足でその背中を踏みつけて、

「知らねえというなア申し上げますという枕言葉だ。そんな白しらを
いくら切つても、手加減をするような眼八じやあねえ！ 吐ぬかせ、
いえ、ひとことというのが遅れるたびに、ひとつずつてめえの面つらに
アザが殖ふえるぞ」

ばらばらと冷たいものが降りかかった。

沖の辰巳島たつみじまから、まともに吹きあげてくる海風に、身ぶるいをした巨松こすげの梢こすげえが、振るい落した白はくぎよく玉しずくの雫しずく——。

眉に光るやつを、手の甲で拭きながら、

「——今から一月半ばかり前に、法月弦之丞とお綱という奴が、酒さかづも菰こもに身をつつんで、小雨のふる闇にまぎれて、大勘の家へ来たという凶星まで、スツカリお調べが上がっているのだ。いくらてめえが親方に義理だてをしたところが、やがてすぐに判ることじゃあねえか、つまらぬ強情を突つ張つていねえで、潮しおびたしをなおしにやったあの刀を、どこへ届けた。その匿かくれ家がを白状してしまえ。すなおに泥を吐いてしまえば、眼八のとりなしで、お上かみのお咎とがめはいいようにしてやるぜ。どうだ源次、オイ源次、よく

胸に手をあてて考えなおせよ」

「徳島へ出かけたついでに、刀を受け取ってきたのはたしかだが、それを途中で棟梁とうりょうの手へ渡したきり、後のことは何にも知らねえ」

「しぶてえ奴だ、じゃ、どうあつても実を吐かねえな、よし」

と、捕縄に輪を描かせて、グルグルと源次の喉のどへからませたやつを、グンと引つ張つて、

「知りませんという音を止めねえうちは、しばらく、こうしてやるから、根こんくらべをするがいい」

「ウム……」と、源次は縄の輪に喉のど笛ぶえをしめられて、苦しもうな眼を吊りあげた。

「どうだな、塩加減は？」

と、眼八、時々ジリジリと締め、

「まだ甘えか、これでもか！」

「くツ……く、くるしい」

「そりやア苦しいにきまつていらあ、まだまだ釘抜きの眼八が本気になつて責めにかかると、こんなどころじゃございませんよ」

と、憎々しい面つらがまえを寄せて、源次の苦しみを冷然と眺めて
いると、突然、かれの後ろのほう——。

そこから木立を隔てて見えるのは、月光の底に沈んでゐる二十
八柱の大伽藍だいがらん、僧行基ぎようきのひらくという医王山薬師如来やくしによらいの広
前ろまえあたり、嫋々じようじようとしてもの淋しい遍路へんろの鈴りんが寂寞せきぼくをゆす

つて鳴る……。

その鈴は、この境内では常に聞くところの、珍しくない音であったが、伽藍の森厳にひえびえとした夜気を流して、なんとなく、釘抜きの眼八の鬼の心をも寒くさせた。

で、場所が悪いと気がさしてきたものか、

「立て！」

といって、源次の首の輪繩わなわをはずし、その繩尻をシヨツ曳びいて、「せつかくここで、おつ放してやろうと思っていたが、そう情を突っぱるならゼヒがねえ、代官所の砂利を咬かませて、ゆつくり、荒療治で聞くとしよう。ばかな奴だ、ここで白状してしまえば、

眼八の胸ひとつ、お咎めなしに見のがしてやるものを、向うへ行きやあ公おおつぴら然になる、泣いてもわめいても間に合わねえぞ」

「……………」

「棟梁の大勤が、どれほど口止めしたかは知らねえが、こんなことで臭い飯をくうなんて、気の利きかねえ話があるものか。御牢舎ぐらいですみやいいが、隠密をかくま匿いだてした連累れんるいとなると、とても、そんなことじやすむまいぜ……エエ源次」

「……………」

「船大工の部屋にゴロついているお前めえにしろ、どこかの在所にや、肉親もいるだろうに、助任川すけとうがわの曝さらし場へてめえの首が乗つてみる、親兄弟にまで、泣きを見せなくちやなるまい。アア、口が酸す

ツぱくなつた、俺にもこれ以上の親切気は持ちきれねえ、さ、立ちなよ、そろそろ行く所へ行くとしよう」

「……ま、待って下さい」

「腰が立たねえのか」

「いつてしまいます、隠していたなあ、あつしが悪うございました」

「白状するっていうのか」

「ハイ……」と源次はしおれ返つて、唇の血を吸うように噛みしめた。

「じゃ、弦之丞とお綱の奴は、いったい、どこにかくま匿われているのだ」

「それだけは、まったく源次も知らないことなんです……ただ、あつしの知ってるだけを白状します」

「嘘はあるめえな」

「へエ、嘘と真を七分三分にまぜたところで、なんの役にも立ちやしません。ほかのことは、洗いざらい申し上げます」

「ウム」

「あつしは、あの侍と若い女が、法月というのかお綱という女か、国者かどこの者か、皆目、そんなことだつて知りやしません。ただ棟梁の大勘が、お家様の義理合いでやむなく一時の匿れ家を、どこかへ探してやったことから、細かい用事をあつしにいいつけたんでございます」

「そのお家様というのは」

「徳島の御城下と大阪表に出店のある、四国屋のお久良様、たしか、そういったと思います」

「ふうむ」

どうやら筋がほぐれてきた。

眼八は、釘抜きのように固く結んでいた口もとから、大きな前歯をニツとむいて、

「その四国屋のお久良に、大勘のやつは、どういう義理合いをうけているんだ」

「あすこの持船以外の仕事は、雑魚舟ひとつつくろわれないというほどな大顧客おおとくいでございます」

「ウ、なるほど」

「ことに、お家様には可愛がられている大勘なので、こんどのことも、嫌とはいえずに頼まれたことだろうと思います」

「そういう仲じや無理はねえ、そして、お久良は今大阪にいるはずだが、どうしてそんな打合せができたのか」

「ちようど、先々月の月つきなか半ばでした」

「ウム」

と、胸で日数を繰っている。

「お久良様からきた飛脚をうけて、棟梁が何か心配そうに考えていました。と、それから三、四日——そうだ十九日の晩」

「えっ、十九日の晩？」

と、思わず、おうむ返しに眼八の返辞が出たのは、胸で繰って
いた日数から推して、それが、ぴったりと四国屋の商船あきないぶねが、
大阪表から阿波へさして出た日に符合ふごうしていたので。

「ウム……それから」と、笑壺えつぼにいつて一心に聞く。

「その十九日の朝、棟梁が突然、小松島こまつじまに長崎型の船が入って
いるから、仕事のために見ておこうといつて出かけました。わつ
しも、自分から頼んでついてゆくと、向うへ着いたのはもう夕方
で、浜へ行ったが、そんな船は見当たらねえんです。で——妙だ
など思ったから、棟梁、どこなんで？ と聞くと、沖だよ、だが
源、てめえ今日のことは、親兄弟にも洩らしちゃいけねえぞ、そ
ういつて、固く口止めされたんで……」

と、その口止めを破っている自身に気がついて源次は、ちよつと、うなだれた。

「それから？」

と眼八は、相手に顧慮のいとまを与えないで、問いつめた。

「じゃあ船図面を取りに来たわけじゃないんですか、ときくと、

棟梁は、ウム、と少し怖い顔をして、小松島の磯をブラブラあるいていましたが、そのうちに、どこからか、船頭三人、ギーと棟梁の前へ漕いできて、どっちも黙だンまりで乗りました」

「それが、十九日の夕方だな」

「そうです。宵はよかつたが夜半よなかです、イヤな雲になってきまし

た」

と源次は、その晩のことを思い浮かべるらしく、海の方へ眼をやった。

宵に飲んだ酒の気もどこへやら、更ふけるほど冴さえてきた月明りに病人のような顔色だ。

「——船が島の蔭へよつたので、ここは？ と訊きいてみると淡路のそばの沼島ぬしまだつていうんで、わっしもあつけにとられました。

——とそのうちに風がだんだん強くなる、浪は荒れる、大雨はやってくる。で、みんなへトへトに疲れた頃、真つ黒な沖合に、ポチと、赤い灯が一つ、浪にもまれて見えました」

「……才才、……ウム……」

「あれだ！　　」といふと棟梁が、三人の船頭に、十両ずつの酒代さかてを投げだして、腕ツ限り漕こがせました。何がなんだか分りやあしません、途方もねえ大暴風雨おおあらしです。だが、ヒヨイと目を開いた時には、向うの船の赤い灯が、前よりよッぽど大きく見えて、なんだか、わーッという声が聞こえやした。近寄つたナ、と思う途端に、その灯も消えれば向うの船も、グルグル廻つていようでした。なおワツワツという人間の声です。まもなく白しら々と夜が明けて、少しなし凪いだ時には、こつちの船は、昨日きのうの小松島を素通りにして、日ひ和わ佐さ手て前まの由ゆ岐きの浜はまへ、ギツギツと帰つていたんです。……へい、これだけいえば、もうお分りでございます、その船の中へ、何をすくい込んで来たか、これ以上、棟梁のしたことをはッ

きりいうのは、なんぼなんでも、舌がしびれていえません。どうか、お察しなすつて下さいまし」

いかにも眼八には、これ以上の贅言ぜいげんをきく必要がない。

あの理智の澄んだ四国屋のお久良が、大阪表からつづらを首尾よく乗せただけで、阿波に到達した時の、より以上きびしい岡崎の船関ふなせきや、撫養むやの木戸の嚴重を、案じていない筈はない。

で、沼島の沖あたりで、こう、かく、というような謀しめしあわせは、とくから謀しめしあわされてあつたのだ。

してみると。

当夜——ふなべりを傾けて阿波方の納戸船なんどぶねがぶつかつてきた刹那、四国屋の船のみよしから、お綱をひっかかえて激浪へ身を

躍らせた弦之丞の行動は、あえて、殺到した追手におどろいて、進退きわまつたのではなく、あのことはなくとも、当然、なすべきことを勇敢にやつてのけたまでであつた。

そして、あの晩の暴風しげと、弦之丞の運命が窮極にまで行つたと見えたことが、それから後、ふたつき二月あまりの経過とともに、すっかり阿波の要心をゆるませ、かなり目ばしこい三位卿にしてからが、一度は、弦之丞の最期を漠然ぼくぜんと信じたものだ。

眼八は、息を内へひいて源次の自白を聞いていた。

かれも、大阪以来の顛末てんまつは承知していたが、こんな裏面があるろうとは、想像もつかないこと、潮びたしの刀から足をつけてここに到つたのは、自分ながら、あやまちの功名という氣持がする。

「そうか！ ……」

と太い息と一緒に、聞き終つて、

「その晩傭やとわれた船頭、誰と誰だか、覚えているだろうな」

「存じません。へい」

「徳島訛なまりか、それとも日和佐の船頭か」

「この辺の者ではなく、おそらく、抜荷屋渡世ぬきやとせいの仲間だろうと思

うんで」

「抜荷屋か？ ……」と眼八も少しウンザリした顔だ。

弦之丞の召捕をすました後で、大勘をはじめそいつらも、芋いもづるにあげてしまおう下心で聞いたのが、海鳥のように、巢を定めない抜荷屋では、いくら釘抜きでも手がつけられない。

長崎沖渡しで、ばんせん 蛮船から禁制の火薬や兵器を買いこむため、

一時、蜂須賀家を利用した抜荷屋のともがらが、いまだに近海の

ののしま

野々島、出羽島、弁天島あたりに巢を食っていて、手のつけられ

ない海かい辺へん漂ひょう泊はく者しゃとなつている。

山の山窩さんか、海の抜荷屋ぬきや、どつちもどつちのしろものだ。

「じゃ、まあ、それはいいとして……」と、匙さじを投げて「由岐の

浜はまへあがつてからどうしていた？」

「あつしはすぐに、潮水浸しおびたしになつたお兩人ふたりの刀を、大黒宗理の

所へ頼んでくれと渡されて、棟梁と別れました」

「そこは？」

「八幡様の森でした」

「弦之丞と口をきいたか」

「あつしがいる間は、棟梁もその人も、黙りあつておりました。もつとも、女のほうが、だいぶ水を呑んでいたのです、その手当てにも追われていたんで」

で——眼八の腹の中の口書は、さつき、中年の小僧がしやべつた話とぴつたり継目つぎめが合つてきた。

「そうか、それですつかり事情が分つた。まア、今のところじやこの辺でよからう、オイ源次、立つてくれ」

「へイ、ありがとうございます」

「なにながありがてえんだ」

「知ってる限りのことは白状しました。約束どおり、放しておく

んなさるんでしよう」

「けツ、虫のいいことをいうなツ」

と、いきなり縄尻をしぼった眼八、

「さ、代官所へ歩け！」

と、源次の腰を蹴って、石段の方へ引きずってきた。

欺しだまに乗ったと知って、源次は、地だんだをふんだ。

いまさら、大勘の信を裏切ったことをすまなく思う。親方の秘密を売って助かろうと思つた根性が、われながら情けない。

だが、もう追いつかない。ただ、齒ぎしりを噛むばかりであつた。

釘抜きの眼八に、弱腰を蹴とばされて、勢いよく突ンのめりながら、何かわめいた。

眼八は、セセラ笑いをして、

「さ、出かけた、出かけた！」

と、もう一つ、足をあげて弾みはずをくれる。

よろけた途端に、捕縄が張つて、また仰むけにひつくりかえつた。

もう自や棄けだという風に、

「畜生ツ」

と、かぶりついてくるのを、

「亡もう者じめツ」

と、用捨ようしやのない捕縄の端で、牛を懲こらすようにひツぱたく。

そして、半死半生にさせながら、女坂をゴロゴロと蹴転がして行つた。

すると。

雪のような月影をふんでまだら石段の下から息をせいてくる三、四人——それと白い月明りと闇のまじった杉木立の間を、バラバラと駈け寄ってくる提ちようちん灯が見えた。

眼八は、

「あつ？」と、むねを衝うつたが、その明りの一つに、海部代官かいふだいかん所しよという朱文字を認めてホツとした。

——というよりはこの場合、助かったという気持で、死物ぐる

いの厄介者を、何よりはその手へと、

「おう、御支配所の衆！」

声をかけると、熱い息がハツハツと聞こえるほど、すぐ側まで駈けてきて、

「や、眼八か」

と、意外らしく、かれを囲んだ。

桐井角兵衛きりいかくべえのさしらずで、少し遅れて出張でばつてきた徳島の町同まちどう心しん、浅間丈太郎あさまじょうたろう、田宮善助たみやぜんすけ、助同心すけどうしん岡村勘解由かげゆ。

提灯しるしを持っているほうは、海部同心の安井民右衛門たみえもんと土岐鉄馬とぎてつばのふたり。

「どうしてここにおったか」

と、一同、不審な顔つきである。

実をいうと眼八は、大勘の家へ旅人として静かに泊り込んだまま、よなか夜半に、外へ迫る捕手とりてへ案内をする約束であつた。

それが、無益むだだとみぬけたし、源次という者に執着をもつたので、急に独断で方針をかえた。そして、これからその源次を代官所へ曳いて、断りことわに行こうと思つていた出鼻でばなだったので、向うも、合点がゆかない様子である。

手短かに、源次から調べ上げた事実を話すと、五人の同心、少し出しぬかれて鼻白はなしろんだ様子に見えた。

眼八は傲慢ごうまんに胸を張つて、

「じや、こいつを渡しておくから、弦之丞を召捕あるまで、海部の

揚屋あがりやへ預かつておいて貰おうか」といった。

海部側の同心は、言下げんかに、

「それは困る」と拒こぼんだ。

なぜ？ と眼八がほじくると理由わけは簡かんにして明、——今、町の辻々に伏せておいた密偵のひとり、この間から行方の知れなかつた大勘がこツそりと帰つてきて、何用か、この薬王寺の道へ廻つたという報しらせ。

すわとばかり、代官所の騒ぎである。

折から、助勢にきて打合せ中の徳島同心、浅間、岡村、田宮の三名も加わつて、捕手はうしろ巻きとして山下に伏せ、五人は先廻りをしてここへ登つてきたところ。

「今、源次をここで預かるのは困る」と、にべなくいったのも、ムリではない。寸刻を争っているのだ。

だが、眼八は我^がを曲げない。

ここは、海部代官の支配区域、本来、お手前たちの腕だけで、こんな者は、とうにパキパキと召捕^あてみせなければならぬのではないか。それを、徳島から釘抜きの眼八様が助^{すけ}に来てやっているんだ。おまけに、縄までかけて渡してやるんだ。もったいねえ御託^{ごたく}をいうな——という鼻息。

慢心もあるし、郡^こ奉行^おの配下^{ぶぎよう}という^こと低く見る癖^あがついている。で自然と、手先のくせに同心^あを顎^ああつかいな物言^あいぷし、海部側も納まらない、ガヤガヤしばらくもめていた。

ところへ、捕手のひとりが飛んできた。

大勘の姿が、参詣道さんけいに見えたという。もうグズグズしてはいられなかった。

「おい、捕方」

と、仲を取って、助同心すけどうしんの岡村勘解由かげゆが、

「お前が暫時これを預かっておけ」

と、半死半生の縄つきを渡した。

渡された捕手は、源次を抱きこんで、女坂を駈け上がり、さつき、眼八が腰をすえたあたりの巨木へ、縄尻を巻いて、番に立った。

海部側も徳島側も、もうケチな仲間割れをいいあっているひま

はない。

無言で、広い境内の物かげへ、思い思いに姿を散らかす……。

腕でこい！ と眼八は、ふたたび前の木蔭へ返って、伽藍がらんの正面につづく白い敷石を睨みながら、腹巻を固く締めた。

——その口には十手。

もう、人気ひとけは滅している。

時折、伽藍の近くから、夜籠よごもりの遍路へんろの鈴りんが、ゆるく、眠たげに……。

シーンとしてしまった。

月の位置もだいぶ変って、細こまやかな針葉樹の影は、大地へ蚊帳かやの目のようにゆれている。

石段の口から、一つの影が上つてきた。

月に白い菅笠すげがさに、顔は暗く隠されているが、肩幅のひろい巨お

男おとこ、裾すそをとつて、脚絆きやはんわらじ、道中差を落している。

ジツと、境内を見廻していたが、やがて、大股おほももに本堂へ向つてきた。と、思うと、またふと足を止めて、参差さんしとした杉木立の奥をすかすように見た。

鈴りんが鳴っている。

かすかだが、耳にふれた。夜籠りの詠歌えいかの鈴りんの音ね。

それを便りに、木立の蔭へまぎれ込もうとすると、いきなり、

「大勘ッ」

と、おどりかかつて行つた釘抜きの眼八が十手で、力まかせに肘ひじを撲なぐりつけてから、

「御用だツ」

と烈れっせい声をあげた。

「あツ」と、よろめきながら大勘。

「しまった！」

という様子で、脱兎だつとのように後へ駆け戻つたが、もう、むらがる人数が足もとを待ちかまえて、

「御用ツ」と、飛繩ひじょうの風！

「御用だ！」と十手の雨。

月光を衝ついてわめきかかつてきた。

わらわらと八方を塞ふさいで、入れ代り立ち代り、からんでは離れ、組んでは解かれる。

「退どいた」

と眼八、海部側の者に見よがしとばかり、群れをわけて正面から飛びかかる。

大勘は道中差を抜いて、かれの真まつ向こうを待ちかまえた。だが、眼八の十手が、風を切つて入ると同時に、飛んできた捕とり縄なわが、拌み打ちに下ろしたかれの手元をさらつて、ガラリと刃物を巻き落してしまった。

黒い人間の声が、山になつて、ひとりの上へ揉もみあつた。

「ご苦労だつた」

と、徳島の同心浅間丈太郎と田宮善助が、火事を消したように一同をねぎらった。

海部側の安井、土岐ときの二同心も、自分たちが、手を下すにいたらなかつたことを同慶どうけいしあつて、

「眼八、さすがに、鮮やかだな」と、ほめた。

「オイ、そつちの奴も曳き出してこい」

助同心の岡村勘解由が、口へ手をかざして向うへどなると、

「おつ」と、さっきのひとりが預けられた縄付きの源次を曳いてくる。

「引きあげましょうか」

と同心連中、涼しい顔で、月明りの顔を見あつた。そして、源次と大勘、ふたりの縄付きを引つ立てて、意気揚々と、前の裏道——女坂のほうへ向つて行く。

わざと、正面の参詣道を避けたのは、医王山薬師如来の霊地を意識するおそれであつた。かれらも、不浄ふじようやくにん役人やくにんということ、気づかずに自認している。

「暗いな」

「こう廻るのが近道なのだ」

そういつたほど、喬きようほく木の厚ぼったい茂りが、一同の上をふ

さいできた。みんなわらじばきなので、シト、シト、シト……と揃あしおとう蹠音が言葉のない間を静かにつなぐ。

ドゥーツと、滝の落ちるような音の奥から、寒いような嵐らんき気が樹々の眠りをさましてくる。大勘は時折、ものいいたげに源次のほうを見た。源次もうなだれて棟梁の影を眺めた。だが、無論、
 一ひとこと 言声をかけることもできない。

と——真つ暗な、女坂の降り口くだにかかろうとした時、すぐそのあたりの物蔭から、鈴りんを振り鳴らして、一同の前へ歩みだしてきた者があつた。

白びやくえ衣えをまとつた遍路へんろである。

紺こんべりの道者どうじゃ笠がさをかぶり、白木の杖と一個の鈴りんを手てにしていた。そして、黙然もくねんと、そこに突つ立つた白い姿かすりに、紺こんのようりな木の影が落ちてゐる。

「退どけつ」

と、ひとりの捕手がどなった。

うつむき加減に、杖をついた道者笠は、月に咲いた毒どく茸だけのごとく、ジイと根を生はやしたまま、退どこうともせず、驚いた様子も見せない。

道者笠の通路、いやに、おつとりとした物構えで、意気揚々と引き揚げてきた捕手の前に、驚さぎとも見える白木綿しろもめんの姿を立たせ、肩杖をついて、黙然もくねんと、いつまでも狭い山笹の小道をふさいだまま、どなられても、動く様子がないので、先に立ってきた捕手の四、五人、少し、小気味がわるくなってきた顔色。

「オイ、同役」

と、後からボツボツ歩いてくる仲間を待ちあわして、

「変なやつがいる」

と、肩だけは突ツ張ったが、やや息を殺したかたちである。

「なんだ、へんろにん遍路人ではないか」

「そうらしい」

「さつきから間の抜けた鈴りんを振って、しきりと医王山の境内をウロついていた奴だろう。それがどうしたんだ？」

「あの通り、道を阻はよめて、テコでも動く気色がない」

「ふて太エ奴やつだ」

と、帯の十手を抜いて、それを手にピカピカさせた一人、ずか

と前へ踏み出して、

「やいッ、遍路！」

と、肩をもたせている白木の杖を、ゴツンと十手でぶちながら

「なんだって、こんな狭い道に棒を呑んで突ツ立っているんだ。退^どけ退^どけッ、海部代官所の者と徳島同心の方が、縄付をつれて通るところだ。動かねえと蹴^{いたけ}飛ばすぞ！」

遍路の笠へ顔をよせて、威^{いたけ}猛だかにどなりつけたが、かれは、依然として、ヌツクと立ったまま、肩杖をついたまま、そして、紺べりの笠をうつ向けたまま、返辞もせねば、微動もせぬ。

ははア！ とそこで顔を見あわせたことである。こいつア片輪

だ。ツンボか唾おしか、気の変な脳病もちかに違いない。常人なみにあしらって、埒らちのあかないのはこっちの落ち度。

だが、不具者の遍路、お上かみの者といつて手荒くもなるまい、どこかそこらの横へソツと抱いて片づけてしまえ！ と目くばせで五、六人ゾロゾロと前へ出ると、その手も触ふれさせず、杖一步、かえって向うから一ひとまた跨ぎして、

「あいや」

と、少し笠を揺るがせる。

「この野郎、唾ではない」

かツと、怒つていうのを冷ひややかに、

「無論——」

と、声を含んで、

「啞ではござらん！」

さらに一步、あきれ顔の捕手の前へ出て、それには目をくれず、紺べりをつかんで相手の肩越しに、後の人数の影を見る。

とは知らずに、得意な眼八と五人の同心組、なお十四、五人の捕手に縄付の前後をまもらせて、何かガヤガヤと話しあいながら、杉と杉との間をうねって押してきたが、道が狭いので三人と肩を並べては歩けず、そのまに先がつかえてしまった。

「オイ、どうしたんだ？」と、うしろのほうであせっているのは眼八の声。

その返辞もこずに前の者が、逆に、タジタジと後退あとすさってきた

ので、のび上がってみると、ひとりの遍路を相手に何か言い争っているふうなので、眼八は縄付のそばを離れて、すばやくそこへ潜くぐって行った。

と見て、海部同心の安井、土岐、助同心の岡村勘解由かげゆ、眼八について列の前へかき分けて出る。

遍路は、磐ばんじやく石ちよりつのように佇立ちよりつしたまま、しきりと猛たける捕手などには、言葉もくれず、耳も藉かさない。そうして、同心組の者が来るのを待ち設けていたように思われる。

「てめえは夜籠りの遍路だろう、何をグズグズいつているんだ、ついでに海部の百姓牢へも参籠さんろうして行きたいというのか」

と、眼八は無造作に見て、その襟えりがみをつまみそうに、片腕の

袖をまくりあげたが、キラツと笠の蔭から射向^{いむ}けられた眼光りに、
そう簡単に手がのびなかつた。

「お前たちに用はない、上役がおるであろう、同心の者をこれへ
出せ」

「な、なにツ？」

「話がある！ 同心衆」

呼ぶように腰を伸ばした。

「何者だツ、貴様は」

海部の安井民右衛門、胸を張って威喝^{いかつ}した。

浅間丈太郎、田宮善助、徳島側の者も何事かと騒いで、捕手を
排^{はい}して進んできた。そうして、口々にまた咎^{とが}めた。

「何者だツ、なんじ汝はッ」

「何用あつてそこに立つのか」

「名乗れ！」

「姓名を申せ」

各 一句ずつわめいたところで、遍路は、さらに悪びれない語ご韻いんで——。

「拙者は」

と、もの静かに名のりかけ、

「おのおのの尋ねている、法月弦之丞でござるが……」

と、澄みきつた態さまで、向うの動どうじ方を眺め廻した。

ぎよツとして足もとを浮かしかけたが、同心も捕手の者もひるがえつて、自分たちの耳を疑っているように。

——拙者は法月弦之丞であるが。

こういったと思う相手の、こともなげな今の声を反復して、見詰めあつた。

そうして、彼とこれとの間に、氷のような無言が張りつまつた。徳島の城下はいうまでもなく、八郡の代官手代が、血眼になつて検索している人間が、捕手や同心の集まつている直面へきて、こゝう冷然と、みずから名乗つて立つばかりかあろうか。

と、一度は思つたが……。

彼の自若じじやくとして不敵ささまな態。わずかにうかがわれる面おもざし、背

恰好かつこう、まぎれもあらず、人相書のそれとピッタリ。

「ア——」

ややしばらくしてから度胆どぎもを抜かれた空声からごえを筒抜つつぬかせたが、助同心の岡村、突然、

「それッ、取り囲め！」

と、ののしつて、身みみずから十手を揮ふつて当ろうとするのを、

「待てッ」と、弦之丞かづの一喝かつが、その出足をくじいて、

「妄動もうどうするな、うかつに動くと危ないぞ、動かぬ切れ刀ものへさわ

つてきて、われから命を落すまい。無益な殺傷沙汰はしたくない

と思う、で、話がある！ 静かにせい」

と、自分の配下でも鎮しずめるように威圧しした。

十手を把る者が、これだけのことを、相手に悠々といわせただけでも恥辱の限りだ。多少の犠牲者を出すまでも、一気に、召捕つてしまえ！ そうはじりじり思つてみるが、どうにもならない相手だった、どこから飛びつく隙もない、いや、既にそういう衝動を作る大きな意気というものを失っていた。

弦之丞は知っている。

すでに、捕手の頭は冷智になつて自分を見ている。何か一瞬の狂人にさせるキツかけがなければ、かれらは決して、朱をあびる域へまで、捨身にかかつてこられない。

「弦之丞！」

やむなく浅間丈太郎がいった。

「——遁れぬところと覺つて自首して出たか」

「そうならば定めしご都合もよからうが……」

口辺に冷蔑を漂わせて、

「少しご無心を申すのじや」

「無心ツ？」

「今、この境内で召捕られた、ふたりの縄付を、拙者の手へ渡してもらいたい」

こんな言葉へ、もしまじめな応答をするならば上役人の資格はない。——弦之丞はそういった口ですぐにまた、

「お渡しはあるまいな、それが世上へ聞こえては貴公たちの扶持ふちばなれじや。しかし、拙者一身のため、縛ばくをうけた大勘と源次を

見捨ててもおかれぬ。どうでもこのほうへ申しうけるぞ」

「だ、だまれッ」

「アイヤ」

「文句をいわさずに、弦之丞を召捕つてしまえ」

「騒ぐなッ、ここは医王山の靈域、汝ら、不浄な血と死骸を積んで、寺社奉行への申しわけ何とするか。それはともあれ、仏地への畏れ、^{おそ}また第一足場が悪い。まず騒がずにおいでなさい。山を下るまでご同道申しあげよう」

先に立って歩きだした。

まさか、逃げるとは考えられない。自分から捕手の前へ立った

彼——。

五歩——六歩——誰も足を出す者がなかつた。

「ぼうじゃくぶじん 傍若無 人なやつだ、よしッ、俺が」

と、釘抜きの齒がみをさせた眼八。

目をつぶつてゆく気もちで、一ちようそく跳 足に、かれの体へ貼りつ

いた。と、弦之丞、身をひねつて、

「これッ」

と、眼八の小肥りな体を、左の腕の中へ締め込んで、グツと抱きあげ、あと後の十手へ白木の杖を一揮ふりするや、急に、眼八をかかえたまま、女坂を闇の底へ、ドドドドツと駈けだして行つた。

途端。

きようち 怯 智な居すくみをどやさされた捕手や同心たち、あツと眼色を

かえ、初めて、瞬間的な狂人になり得て一散に、麓ふもとへ小さくなる
白いものを追いかけた。

やがて、薬王寺の山の裾すそで、ワーツと、乱闘の叫びが起こる。

目前にいた対手あいてを逸して、今さら仰天した捕手のわめきである。
う。逃がしては大事と、駆け廻っている同心たちの叱咤しったであろう。
ところが、皆の疾走したあとに、三、四人ほど駆けおくれ
た。

召捕った二人の縄尻をつかまえていた者で、これは空身からみでない
から、走るに走り得ないで、縄付を突きとばすように、後からあ
わてて気を急ぐ。

いちど走りだした同心の土岐鉄馬は、ふと思ひあたつて、

「アツ、もしや？」

と、途中から踵くびすをめぐらし、大急ぎで後へ戻つてみた。かれの推測は誤つていなかった。

はたして、大勘は、この機会にすなおになつてはいなかった。

自分の縄尻をつかんでいる捕手を蹴倒し、源次も、腕はきかないが、親方の大勘と一緒に、死にもの狂いで、あばれ廻つていた。近づくに従つてその様子の見えた土岐鉄馬は、いい所へ戻つてきたと一足跳とびにそこへ来るが早いか、

「おのれ、まだ無用な手抗てむかいをしているかツ」と、十手をもつて、骨ぶしの碎けるほど、源次の肩を撲なぐりつけた。——で、その途端。

「わッ……」

と、大地へ仆れたが、それは、打たれた源次ではなく、鉄馬であつた。

後頭部から背すじへかけて、土岐鉄馬は斬られていた。傷が浅いので死にきれず、ウームとうめいたかと思うと、十手をつかんだなり自分の血の中をころげている。

「あッ」と、縄尻をほうりだして、逃げかけた捕手も、脛すねを払わ
れて前へのめつた。残るひとり、源次が夢中で蹴とばした足の
先に、脾腹ひばらをかかえて悶絶もんぜつした。

途端に——源次も大勘も、今まで性しょうなくシビれていた両の腕が、
ふツと自由になつて、一時に早い血の脈をうってきたのに、われ

ながら茫然ぼうぜんとした。

その、茫ぼうとみはつた目の前には、ひとりの美女が立っていた。艶えんとはいえないがすきとおる水のような美しさ、白い行衣ぎようえを着た肌の白い黒髪の美女である。

「才オ、お綱さん！」

大勘は源次へ目くばせした。源次は縛いましめを切られた腕をさすりながら、あたりを見廻してかがまり込む。

「——弦之丞様と御一緒に、どこにおいででございました」

「ここで待ちあわすという約束なので、宵から上の森の中に、お前さんの登あしおと音を待っていました」

「あ、そのうちにこんな手違い？」

「源次が捕まったのも知ってはいたが、お前さんが来てからの思案と、森の蔭で心配しながら、息を殺しておりましたのさ」

弦之丞と同行同衣どうぎようどうえの遍路にやつした見返りお綱。今——土岐鉄馬のうしろへよつて、浴びせつけた新藤五の小脇差をさげている。

それはまだ大黒宗理の手で研がれてきたばかりの刀もの、斬つてもその切ツ尖さきに、口紅ほどの血も止めていない。

「ここには海部の捕手が、また押し返してくるにきまつているから、お綱さんは、源次に道案内をさせて、ここの裏山を抜けて、赤河内あかかわちへお逃げなさい。あつしは、捕手に追われて行った弦之丞様の安否を見届けて行きます」

「ご親切だけれど、それに及ばない。弦之丞様は、わざと捕手を釣りこんで、麓のほうへ駆けだすから、後で三人はここから先に、土佐街道の寒葉かんばへ出て、そこで待ちあわしていてくれるとおっしゃったのだから」

「ですけど、あの人数に囲まれちゃあ……」と、大勘が不安らしくいうのを、お綱は、微笑ほほえんだきりで、自分から先に裏山の道を上りだした。

そして、予定どおりに寒葉かんばの近くで、後から来た弦之丞と落ちあつた。かれの手甲と裾すその二所三所に、黒い血痕けつこんがついていた。大勘は、怖ろしいような、不可解なような顔をして、歩をともにしてゆく、その人の横顔を眺めていた。

土佐街道が白々と明けてきた頃——四ツの影は、牟岐むぎの上流から本道と岐わかれて、笹見ささみ、西又にしまた、入道丸にゅうどうまる、いよいよ深い奥おく海部いふの山地へ分け入っていた……。

翌日。

こんもりした槇まきの森蔭で、わずかな眠りをとった後。

大勘はふところから一枚の山絵図を出して弦之丞に見せた。お綱もそばへ寄って眼を落した。劍つるぎ山の山絵図である。

源次は森を出て見張っていた。こうしている間も、日和佐ひわさから殺到してくるであろう捕手の蹠音が聞えるようではない。

「まるで、道がないような所です」

大勘は、数日家を空にして、苦心して描いた山絵図を前に、あれこれと、細かい心おぼえを説明した。

かれが指さす図面に目を辿らすと、彼岸劍山の頂へ行きつくには、まだ重畳たる山また山が阻めている。

杣か獵師でもなければ、通わない所が多い。

大体、劍山へのぼるべく、ここを選ぶのは順路ではない。だが、順路をとって行かれぬ二人の目的、ぜひがなかった。

弦之丞とお綱よりは、二日半ほど早く徳島の城下を出ている竹屋三位卿とほか三人組が、急いで行ったあの道こそ、劍山へのぼるに都合のいい表道。途中、お十夜の用で、川島に一日あまり費やしたにしても、かれらの一行は、やがて貞光口から塵表

の巨山を仰いでいるに違いない。

かれは北、これは南、かれは表道から、ふたりは道なき裏にかかっている。

だが、その者たちが、自身より一足早く、甲賀世阿弥よあみを殺しに向っているとは、もとより知らないふたりであつた。

「何よりの心づけかたじけない」

大勘の厚意を謝して、弦之丞はその山絵図をふところに納め、追手の姿を見ぬうちにと、また一心に道を急いだ。ある時は、口もきかず、ある時は、行ぎょう願がんに向つてゐるような汗をしぼつてゐる自身に気づいた。

「剣山は……まだ？」

お綱はそういう言葉を、時折、大勘へくり返していた。

「まだ見えません」

……………。

「剣山は？」

「まだです」

清澄な空気、耳なれぬ禽とりの声、森々しんしんと深まさる山また山。行けども山である、行けども山である。

沢を下り、岨そぼをめぐり、わずかな山村を眺め、また奥へ奥へと歩みつづける。たまたま逢う樵夫きんりや部落の人も、遍路姿のふたりに、何の怪しみも持たなかった。

「あれだ！」

力のこもった声で、大勘がこう指さした。

四人は、ほしこえとうげ星越峠を踏んでいた。

「えっ、劍山？」

「あれが劍山です。次郎笈じろぎゆうと矢神丸やじんまるの間から、肩を張りだしている山がそうです」

「アア、あの……」と、お綱も大勘が指さすところを指さした。

弦之丞も黙然もくねんと、ふたりの見まもる山を見つめている。お綱は何かの感慨に衝うたれて、白雲の流るる行く手に佇立ちよりつした。

アア、あれが劍山か——。

そう思つて見た山は、父の姿を仰ぐのと同じ感銘を与えた。まだ見ぬ父の姿は、劍山を見て逢つたと等しい心地がした。

動こうともせずじつと山と直面しているうちに、お綱の目がしらは、涙でいっぱいになつてきた。涙で山が見えなくなつた。

（お父さん！ 生れてからまだ顔を知らないお父さん！ お綱はここまで来ているんですよ！ あなたに会いに、あなたが生涯をかけた仕事を活かしに）

声いっぱい、あなたの雲表へ、お綱は呼びかけてみたかつた。

だが、直前に見えるようでも、まだそこへは数里、それも、これからはいつそう峻しい峽谷や岩脈に阻まれて距離がある。——でもお綱には、ここから呼べば、剣山の山牢から、才才と、返辞が木魂こだましてくるような気がするのだった。

「では、大勘も源次も、どうか、ここまでとして、後へ帰つてくれるように」

弦之丞は、笠ぐるみ頭ずを下げ、二人へ礼をのべ、袖を別つことを宣した。

「気の毒な……」と、弦之丞はふと暗くなった。さだめしこの者たちは、後で代官所の追捕ついぶにお趁おい廻まされなければなるまい――。

「じゃ……どうぞ御堅固に」

と大勘も別れをつげたが、弦之丞のすまぬ色を見て、言い足した。

「お案じ下さいますな。あつしと源次は、これから土佐境とさかいの港へ出て、そこから拔荷屋ぬきやの仲間をたのみ、しばらくどこかの島でほ

とぼりをさましておられます。そのうちには、四国屋のお家様にお目にかかつて、何とかいたすつもり、そこは手に職のあるありがたさで、尺金さしがね一本ほんさし込んでいれば、どこの国にも天道様てんとうさまは照つております」

なおいろいろと、山へかかった場合の注意を残して、大勘と源次は後へ取つて返した。

その後——やや久しいこと、お綱は茜あかねいろ色いろに変わってくる雲と山あしたに明日を思い、弦之丞は、山絵図を按あんじて、山へかかる二つの道について考えている。

そこは廃寺の方丈のあとであろう。荒れはてているが、古ぶす

まの白蓮びやくれんには雲母きんぼのおもかげが残っていた。古風な院作りの窓から青い月影がしのびやかに洩れている。

荒涼とした室内の、くもの巣だらけな欄間らんまや厨子ずしに、はげ落ちた螺鈿らうでんの名残りが猫の目みたいに光っていて、湿しめっぽい妖気ようきを漂わせ、かびと土の香をまぜたような、一種の臭においが面おもてを衝うつ。

「明日のために」

との心がまえで、あれから峠を下りた弦之丞とお綱は、十分な眠りをとるべく、この廃寺へ入った。

眠ろう。眠らなければいけない。

お綱は経きよう筥ぼこにもたれ、弦之丞は何かに腰をかけて、杖に肩ささを支さえていた。しかし、しきりと旋舞せんぶする毒虫やバサと壁をうつ

蛾^がの音に、ふたりの神経は容易にしずまらなかつた。

「明日は剣山にかかるのだ」

そう思う昂^{こうふん}奮も、よけいに眠りを拒んでいる。ほとんど、死の世界のような寂寞^{せきぼく}さも、かえつて心を冴えさせた。

うつうつとまどろんでいたかと思つた弦之丞も、やはり眠りつかれずにいたとみえて、不意に立って、方丈を出て行つた。

しばらくすると、枯れ杉と榲^{かや}の枝をつかんで戻つてきた。そして、所を見計らつて、その榲^{かや}の木をプスプスと煤^{いぶ}しはじめた。

お綱の眠りつけないでいる様子を見て、蚊や毒虫を追つてやろうとする、弦之丞の心づかいであつた。うすくまつわう煙の情けが、お綱の身を和^{やわ}らかに巻く。

ようやく、虫の責め苦からのがれた。

だが、お綱はまだ眠れなかつた。

「弦之丞様、まだ夜明けには間がありましたでしょうか」

「そちは少しも寝ないようだが」

「なんとなく気が冴えて」

「それはいけない」

「でも、ゆうべあの森で、だいぶよく眠りましたから」

いっそ夜の明けるまで語り明かしたいとお綱は思った。弦之丞も眠られぬまま、つい答え、つい話頭を向ける気持になる。

万吉はどうしているだろうか？ 常木鴻こうざん山さんもさだめし消息を

案じているだろうか？ 松平左京之介様は、自分たちの吉きつ左そう右をを、

首を長くして待っているに違いない。

そんな話。

そんな話からお綱は、お千絵様は——といつて弦之丞の顔色を見た。

かれは、それなり黙然もくねんとしてしまった。

お綱は自分のつつしみを破つて、ふと弦之丞を憂暗ゆうあんにさせたことをすまなく思った。もとより、この人とお千絵様とは、切る、捨てる、ことのならない仲なのである。

生れた時から悲恋の宿命をもっている恋。咲かない土に芽生めえた花、それが、自分の恋ではなからうか。

普通の境遇きょうぐうの人なら、なんでもない、実父の顔をひと目見

るといふことが、生涯最大な希望になるほど不幸せな身には、恋にも、同じような恵まれない宿命をもつていた。

劍山へ行くまでの——この苦難の途中だけが、わずかに楽しい恋の時間だ。自分の恋のゆるされる道のりだ。そしてその恋も、あるものを超えてはならない恋。

はかない！

こんなはかない恋があるうか。

父の世阿弥に逢うという、希望の彼岸ひがんに立った時は、恋人を、義理のあるお千絵様に返さねばならない時だ。

劍山のいただきは、お綱に最大な希望と最大な失望の二ツをもつて待っている。人生の悲喜明暗ふたいろの雲がそこにはたなび

いている。

弦之丞は沈黙をまもり、お綱は眠りを装^{よそお}つて、思い悩む。

「ああ、もつとあの山が、遠ければいい……」剣山にいたることが遠ければ遠いほど、お綱の恋はこのままでいられる。よしやそこに、あるものを超^こえるまでの強い力が結ばれなくても、ふたりの世界、楽しい旅が、お綱にはある。道が嶮^{けわ}しければ嶮^{けわ}しいほど、夜が暗ければ暗いほど、お綱の旅は人知れず楽しい。

しかし、もう二人は、剣山の裾^{すそ}まで来てしまった。苦難、迫害、ふりかえってみても、お綱には、なお短かった心地がする。

明日^{あす}は明暗の雲をわけて、間者牢に初めての父の顔を見る！

それも待たれてやまぬものだ、今でも、想像の父の顔が、眼の前

にチラつくほどである。どういおう！　なんと名乗ろう！　千々ちぢに乱れて涙ばかりを見あわすであろう！　そんな想像だけでも涙がわく。

と、かの女の乱れた胸じよに、微笑をそそるような空想がかすめた。「死ぬという方法があるじゃないか。剣山へ行きついた後に、弦之丞様とふたりで死ぬのが、すべての幸福をもちつづける一番いい道じゃないか。死出の旅は長い！　剣山へ来たよりは遠い！　そして静かで果てというものがない」

父に会った歓びよろこの絶頂に、弦之丞とともに手をとって死のう。そう思うそばから、また、一方の心は、

(お千絵を不幸に墜^{おと}してもよいのか！)

と責める声がする。

劍山に行きついて、劍山の土になるのは、いわゆる、木乃伊^{みいら}りの木乃伊^{みいら}になるの類^{たぐい}で、弦之丞がここまでの苦^く難^{かん}も、結果は、無意味なものに帰してしまふ。

ふたたび重囿の阿波を逃れ出なければならぬ。

その時になって、初めて、父の名も闇から光明へ、弦之丞も一箇の武士として、栄光の江戸に迎えられる。

すべての、いい結果を呪^{のろ}つて、わがままな死の世界へ、弦之丞を導こうとする心を、お綱は自身でおののいた。奔放になろうとする恋のわがまま——自我主義をおそろしく気づいた。

「そうはなれない、私の気性でもそうはなれない」

お綱は情熱と理智のたたかいかいにもまれて、固く睫毛まつげをふさいでいた。弦之丞には、静かに眠っているふうを粧よそおっている心の奥で

「生きねばならない」

と、つよく思い返した。

「目ざして上る時よりも、いつそうなまつしぐらで、剣山をのがれ出なければならぬ。死んではならぬ！ 弦之丞様を死なしてはならない！ そして父の世阿弥とその人を、義理あるお千絵に渡してやることを自分の本望としなければならぬ、それを、無上として歡ぶのが人間だよ、愛だよ！ —— じゃあ、お前はな

んにもなくなるではないか？ 愛つて、人間の一生つて、そんなつまらないものでいいものかね？ そうさ、ほんとに空くうな話だ、だけれど、そうした自分を無にする気もちは、さびしいだろうが、まんざら悪いものじゃあるまい。私はそれを信じよう、考えてみればもともとから何もなかったお綱お綱じゃあないか」

眠りを粧よそおっているまぶたから、いつか、涙……涙……涙……と

めどなくながれている。

南無なむだいしへんじょうこんごう大師遍照金剛——。

廃寺の内陣で唱える人声があつた。お綱は、今宵この荒れ寺に、自分たちのほかにも行き暮れた遍路が雨露をしのいでいるのを知つて、そつと、涙をふきながら弦之丞を見た。

杖により、壁にもたれて、寂じやくとしてゐるその人は、寝ねているのか、起きてゐるのか分らない。白しろい行衣ぎょうえの裾すそを、櫃かやの煙けむりがうすく這はつて――。

お綱おつなは遠とほいところの、鉦かねと詠歌えいかの声こゑに、思おもわず耳みみをすませられ
た。

ぎやく縁えんも

もらさで救すくう

ねがいなれば

巡じゆん礼れい道どうは頼たのもしきかな

南な無む大師だいし遍へん照じょう金こん剛ごう――

その巡礼道じゆんれいどうの身みではないが、お綱おつなもせめて、今いまの一時ひとときでも、そ

の境地に安住して寝やすもうと念じた。しばし静かに口のうちで、あなたの詠歌の声について合せている——。

と、突然。

バリバリツと、院作りの窓を破り、おどり込んできた同心四名。

山支度をして十手をくわえ、まつ先に、豹ひょうのごとく飛びこんだのは海部同心かいふどうしんの安井民右衛門やすいたみえもん。

「弦之丞、お綱、御用であるぞ」

と、雷声をつんざかせた。

アツ——と不意をうたれて、お綱が方丈の外へ退のくとたん、安井同心はピシリツと白木の杖で腹を打たれた。眠っているよう

に見えた弦之丞が、咄嗟とつさ、そこを支えたのである。

「ウム！」と氣丈な安井同心、杖をつかんで奪おうと試みた。

白刃を仕込んだ杖！ 相手につかませておいて、弦之丞、合あいく

口ちに掛けていた指を弾はじくように開いた。

と杖はそこから二ツに別れて、アツというと民右衛門、鞘さやだけ持つてよろよろと後ろへ。

そこを真まつ向胸こうむなおと落し！ 切さきツ尖さきはなお余あつて、膝行袴たつつけの前ま

で裂いた。たじろぐ隙に、弦之丞は、死骸のつかんでいる鞘をと
り、それを下段に、白刃を片手上段に持つて、四、五たび廃寺の
廊下を駆け廻めぐっていたが、やがて、お綱の姿をチラと見て、庫裏くり
の裏手へ飛び下り、大竹藪の深い闇へ、ふと、影をくらましてし

まった。

けつびつおんみつしよ
血筆隠密書

かんじゃろう 間者牢の せきぐがい 柵外に、山番が焼飯の糧を^{かて}おいてゆくのを取りに出る時と、けいりゆう 溪流へ口をそそぎにゆく時のほかは、どうくつ 洞窟の奥に陽のめも見ず、精と根を^{ひじょう}秘帖にそそいで、ここに百四十日あまり、血筆をとつて岩磐の火皿にかがまったきりであつた^{こう}甲賀世^が阿弥^{よあみ}も、今はようやく疲れてきた。

疲れてふと洞窟の床^{ゆか}へ身を投げて^ふ臥すと、^{こんこん}昏昏々々として二日もさめないことがある。そんな時、^{とうしん}頭心だけが^{きり}錐のように^と研げて

いた。書こうとする意気をもつ、これを書き遺すことによつて、自分は犬死をまぬがれる、おんみつしようがい隱密生涯の墓石が立つ、武士の本分をつくし得る。

で、書こうとして起つのである。けれどその意気はあるが、今は精根がつづかない。精根はしぼりだしても、筆を濡らす血がもう出ない。指、腕、もも股、かれの全身は油液を採りつくされた漆うるしの木の皮みたいに傷だらけだった。

十幾年もの間この山牢こころつに生きて、たださえ痩せ衰えていたかれは、血筆をもち初めてから一層枯骨をむきだして、幽鬼のようになつていた。ぎよう一行に精をきらし、半行に血が出なくなると、世阿弥は落ちくぼんだ眼を光らして洞窟の外へ出てくる。

そして、餓鬼のように、野葡萄のぶどうや山苳いちじくを食べ草の茎くきを嚙む。溪流にかがみこんで、小魚や水に棲すむ虫まで口に入れた。血を摂とるべく食うのである。生きようとする本能よりも、筆にぬる血墨をつくるために食うのが、この場合の世阿弥であつた。

ひと頃、山牢の近くに春を染めていた岐良牟草ぎらんそうのむらさき花も散りつくして、真ツ赤な山神しやくじようの錫杖しやくじようや白龍胆しろりんどうや桔梗ききようの花がそれに代つていた。かれはまたぎらん草にかわる色素をたずねて、それには事を欠かさなかつた。

ほんの常識的にわきまえていた本草学ほんそうがくが、どれほど実際に役立つたかしのれない。かれは自分の知識にある限りのことを今の上に応用した。そして、ともあれ、三位卿の落したこほうじようがた小法帖形こほうじようがたの

海図の余白から裏へかけていちめん、微細な文字をもつて埋めた。

もうわずかだ、もう五、六行。

そこまで辿り^{たど}ついてきて、世阿弥はふと、

「おれは死ぬだろう」

と直覚して、筆の穂をふるわせた。

「あとの五、六行を書きおえたとたんに、おれはバツタリ眼をおとしてしまうに違いない！ そんな気がする！ アア、あと五、六行だ」

かれは高い山の頂^{いただき}へついた時のような呼吸の逼^{ひっそく}塞をおぼえだした。指をやらなくても感じられるくらい、乱れた脈を搏^うつていた。

「アア、あと五、六行だ」

火皿の獣油がとぼりきれたのを機しおに、洞窟から這いだした。

ぐツたりと山牢の口によりかかつて、かれはしばらく目を閉じた。そのわきに合ねむ歡の大木が立っていた。淡紅色の合歡の花と俊寛のようなかれの姿とは、あまりにふさわしくない対照であつた。尖とがつた膝へ手を結んで、独り語につぶやいた。

「ここで、おれのなすべきことだけはした」

だが？ ……と世阿弥はすぐに後の哀あいじやく寂じやくにうたれた態さまで、

おそろしく光る、そして空虚な目を、的あてなく空に向ける。

血をしぼってなしあげた穩密覚え書の一帖も、江戸の大府だいふへ送り届ける頼りはなし、このまま木乃伊みいらとなる肋あばら骨ほねに、抱いて

ゆくより道はないのである。

「それでいい」

かれは、諦めるよりほかない所へさびしい肯定を落して、

「それでいいのだ……」と重ねて、独り語をいった。

「やがて、おれの死に骸からあの一帖を見出した時には、阿波の武士たちも、いかに大府笹の間の隠密というものが、使命を奉じるに根強いものか、侍根性のない執着をもつものかを知つて慄然とするだろう。そして、後には人の口からわしの最期も江戸

表へ通じるであろう。しかし、それと共に、仲間で誇る隠密魂もおそらく、この世阿弥の終りと一緒に甲賀組にも亡ぶに違いない。世の中が変つている、わしが江戸を出た時からもう元和寛永の

世の中ではなかった。それから十幾年……」

ふと、膝に落ちている合歡ねむの花に目が行った——うす紅い合歡の花。

その優しい膝の花を眺めていると、かれの想像は、ふツと翅はねが生えたように飛んで、ふたりの可愛らしい少女をとらえてくる。

江戸表に残してきたお千絵であり、腹ちがいのお綱である。

もう二人の娘は、その頃の少女ではないと思っても、かれの想像はやはりあの当時の稚おさな顔を描いてみせる。

「ふびんな娘たちよ……」

合歡ねむの花は世阿弥のくぼんだ眼からポロポロと涙を呼んだ。

その時、一本の羽白の矢が、ヒュツ——と鏃やじりに陽ひの光を切つて、

うつつな、かれの姿を狙つてとんだ。

「しまった！」

と、三位卿、素早く二の矢をつがえて向うを見た。

山牢のある瘤こぶやま山の裾すそは、覗のぞき滝たきの深潭しんたんから穴あな吹ふきの溪谷へ

落ちてゆく流れと、十数丁にあまる柵さくが、その地域を囲つてい
る。

柵外まないたいわの俎板岩ねむの上に立つと、あなたのほうに洞窟の暗い口と、

合歡ねむの巨木が見えた。有村は、弓を構えて磐ばん石じゃくの上に立つて

いたが、

「ちイツ……」と舌打ちして、しぼりかけた二の矢、弓ぐるみ、

ガラリと手から捨ててしまった。

「お手際てぎわ」

と、下から賞めた者がある。

「皮肉を申すな」

と三位卿は、岩から跳び下りて、天堂一角、お十夜孫兵衛、旅川周馬、その三人の前へ立った。

「むごい殺し方をするよりは、ただひと矢にと思ったのだが、一の矢、襟えりもと元をかすめて合歡の木の幹へ刺さってしまった」

「では、世阿弥のやつ、覚さとりましたな」

「ふいと姿を隠しおった。しかし、逃げられる場所ではないから安心じゃ」

「殺^{せつがい}害しに來たのを知つたとなると、かなわぬまでも、さだめしジタバタするでしょう」

「なぶり殺しもぜひがない」

「衰えきつた老いぼれ、大したことはあるまい。じゃ一刻も早く殺してやるほうが、せめて殺^{せつしよう}生の罪も軽かろう。おい、天堂」と、お十夜は先に立つて、

「どこから柵を超えるんだ？」

「もつと上だ、この辺は一帶に柵と激流が一緒になつてゐるから、とても乗り超えてはゆかれない。もう少し上へ登ると、山の腹へかけて流れに添つていない所がある」

「よし！」と、周馬も前へ出た。

周馬の氣負きおったうしろ姿を見ると、天堂はニツと笑った。決して、悪い意味ではなかった。——この男も可愛いやつだ、そう考えて、和田峠で癩かんしゃく癩しゃくまぎれに、煙管きせるをぶつけた時のことを思い出したのである。

「最初は、ひどく油断のならない男と考えていたが、決して、ムキになつて憎むほどの人間じゃない。むしろ、愛すべき稚氣ちぎさえ持つているじゃアないか！　こうして世阿弥を殺すにも先に立つてゆくんだからな」

と、かれの背なかを眺めながらゆく。

お十夜は幾度も剣山を踏んでいるが、周馬は初めてなので、嶮けわしいのにあきれている、俱利伽羅坂くりからざかでもかなりヘトヘトになった。

だが、ひと度冷やかな山気に面を吹かれると、その疲れも忘れてしまう。

次の山容をおおぎ、谷をのぞいて、森々たる喬木林の間に、合歡ねむの木も多いのにも驚いた。和州多武の峰わしゆうとうにのぼった折に、この花の多いと思つた記憶はあるが、かくも幽邃ゆうすいな光線と深い冷気のうちに塵ちりもとめぬ神秘さをもつた花とは違つたように思われた。

人を殺害せつがいしにゆく人間にも、山は冷寂れいじやくな反省と幽美な感激を与えている。けれど人間はなかなかそれに浸りひたきらず、邪念なかなかそれには消えない。

すでに四人は、大刀に反りを打たせて踏み登ってくる。

世阿弥の生命いのちは風前のともし灯。

さつき、かれがふと意識した脈音のみだれは、この兇事きょうじの来たることを肉体の持主に予察させた靈感の微妙であつたらうか。

「死ぬナ、おれは」

不思議にみずからこういった。

しかし、人間にさほど霊の感知がありうるならば、父子同じ血をもっているお綱の血のうちへ、世阿弥の今搏うつ脈音がひびいてゆかないものだらうか。

深夜、廃寺の方丈から、ふたたび徳島海部かいふの同心に追われた弦之丞とお綱は、あれから、深林、峽きょうこく谷をよじのぼって、剣山の裏伝いへかかったことは想像に難くない。

それは弦之丞が、医王山の境内でも廃寺の折でも隙を見るや一散に逃げ去ったことであきらかに知れている。かれには、捕手も同心もない。ただあるのは、目指す剣山の山牢があるばかりだ。けれど、貞光口から難なくここへ来た三位卿の一行と、道なき裏山の、それも山番の目を忍び忍びくる彼とは、時間にして半日、嶮路の不利にしないでいぶな差がある。

ただ、僥倖しあわせというべきことは、深更しんこうに十手の襲うところとなつたため、勢い、あのまま暁へかけて、道を急ぎにかかったであらうと察しられる一点。

そうすると、麓ふもとの見付役所で、山嵐の寝心地よく、遅くまで、熟睡してここへ着いたお十夜などよりは、ゆうに半日以上はやがの早駈

けとなり、時間の差だけは取り返して余りがある。

かれの消息については、漠然として疑懼ぎぐをもつただけで、徳島の城下を離れてきた有村や三人組、もとより間髪かんはつの差で、ここへ弦之丞とお綱がくるとは夢にも知らない。

急ぐうちにもどこか悠々として柵を越える場所を見廻してくと、やがて面前に見た急坂きゆうはんの上から、早足に駆け下りてきた人物があつた。

四人が姿を隠したと知らずに、そこへ駆け下りてきた男、日ひよけ除笠がさをおさえて、大股にゆくところを、いきなり跳びついたお十夜が、どこをすくつたか、気味よく投げた。

「あつ！」といったが、日除笠、すつくと向うに立ったので、怪しい！と天堂や周馬が、いちどに三方から姿を見せると、

「な、なんだ！」

声はでかいが、案外なあわてざま。

「貴様こそ何者だ、見れば、町人姿、山牢のあるこのあたりへ何の用があつてウロついている」

「じゃあ、あなたがたは蜂須賀家の……」と言いかけたが、町人、小首をひねった。総髪、十夜頭巾、顔の見えない編笠、見くらべて妙な顔をした。

「アー」と、そのうちに、後ろにいる三位卿を見つけると、あわてて、笠の紐ひもを解いて、

「そちらにいるのは、御城内のお公卿様、わっしは、徳島御奉行の下廻り、釘抜きの眼八という者でございます」

「才、手先の眼八か」

一角は顔を見知っていた。

「あ、天堂様でございましたか、ひどい目に会わせますな、あぶなく谷間へ玉転がし、命を棒にふるところでした。だが……ああ、いい所で会ったもんだ」

胸板へ汗ビツシヨリ、押し拭ぬぐつて、笠を団扇うちわに、ほつと一息ついている。

「眼八」と、一角は素振りを見て、

「妙なほうからやってきたな、いったい何用があつてこの剣山へ

来ているのか」

「ご存じはありますまい」と、眼八は、これほどのことを苦もな
く話してしまうには惜しい気がして、

「何しろおおごと大事になつたもんです」と、もつたいをつけた。

そうした後で、眼八は、事実の細要より自分の功を誇り顔に、
弦之丞とお綱の行動を手にとるように話した。

その生死すら疑惑にしていた四人は、聞くにつれて開いた口が
ふさがらない。のみならず眼八の言によると、お綱と弦之丞のふ
たりは、星ほしごえ越とこの山の中間にあたる廃寺からのがれだして、
遂に剣山の樹海のような森林へ影を隠してしまつたということであ
る。

「で、なんでござんす」と、眼八は話の筋にひと区切つけて――
「あつしは同心方と別れて、ひと足先に間道を登り、やつらの道に網を張つておりましたが、なにしろこの通りな深山幽谷、町の捕物みたいなわけにや行きません。それにご承知のとおり土佐境から海部方面は、道が峻しい代りに、目付役所もなく、山番も手薄なので、案外楽に来られるということを実地に踏んできましたから、こりやあいけねえと、急に泡をくツて考えなおし、これから、原士衆の詰めている麓の木戸へ行つて、この大變をお報らせしようと思ひ、急いで、平家の馬場から降りてきたところでございます」

ひと息にいつて、汗光りの赭ら顔を手拭で拭き廻つた。

「ではお綱と弦之丞めは、すでにこの山の深みへ入り込んでいると申すのじやな」

「多分……」と少し曖昧あいまいになつたが、眼八、自分の見込みに誤りはないと自信をもつて、

「……そうだろうと思います、いや、こつちで下手へたを踏んでいると、いつ、この間者かんじやろう牢へあらわれて、世阿弥を助けだそうとするか分かりません。なにしろ、ご要心なすつて下さい」

三位卿は迷惑してきた脳髓のうずいをいきなり村正むらまさかなんぞの鋭利な閃刃せんじんで、スツカリと薙なぎ抜けられたような心地がして、踏みしめている足の裏から、かすかな戦慄さえおぼえた。

「ここへやって来る以上は弦之丞も、死にももの狂いに違いありません」

せん。たださえ腕の冴えた奴、そいつが夜叉やしやになつて暴れ廻つた日には、とても、同心方やあつしの手では抑えがつきません。どうか、よろしく一つお手配を願ひとうございます」

「そうか……」と、すべてを聞き終つた有村は、下唇を締めて、こうしてはおられないという焦しょうそう躁そうを、静かな動作のうちにするがせた。

「眼八、そちはこの足で麓へ逃げ、そして山見付の溜りたまへ急を知らせ、十分に、手分けをしておくよう、この有村がいいつけじやと伝えるがよい」

「合点です、じゃ……」と、笠をかつぐのと目礼を一緒に、釘抜きくりからざかの眼八、汗の乾くまもなく、足を急がせて、俱利伽羅坂くりからざかを降り

て行つた。

後に残つた四人、何かヒソヒソささやいていたが、やがて、目配せをしあつて、柵さくの尽きる所から重ちようじよう 畳じようした岩脈へ這い上がり、ヒラリ、ヒラリ、山牢の地域へおどり込む。

まだ七刻ななつを過ぎたころ、黄昏たそがれには間のある時刻だが、剣山の高所、陽は遠く山間やまあいに蔭かげつて、逆しまさかに射さす日光ひただきが頂いただきにのみカツと赫あかく、谷、峽かい、山のひだなどにはもう暗紫色な深い陰影がつくられている。

咲き乱れている山神の錫杖しゃくじよう、身を隠すばかりな茅萱ちがやなどの間をザクザクとかき分けて、やがて小高い瘤山こぶやまの洞窟へ這い寄つた四人――。

お十夜と天堂一角は、抜刀を背後へ廻して膝歩きに、ソツと、穴の両脇から、息を殺して暗い奥を覗きこむ。

スウ——と下がっていた一本の銀糸に、びつくりしたらしい蜘蛛が一匹、岩天井へ手繰り上がった。

氷室のような冷気を感じながら天堂とお十夜孫兵衛、洞窟の奥へスルスルと這い進んで行った。

「ヤ、いねえぞ」

先へ向った孫兵衛の声が、暗闇の突き当たりから、ガアーンと響いて返ってきた。

「ナニ、おらんと？」

「ウーム、見えない」

「さてはほかへ隠れおつたな」

「隠れたって、間者牢の柵、あれより外へは出られねえものを」

「こんな中に生きていても、やはり生命いのちは惜しいものとみえる。

出よう、外へ」

手探りで後戻りをしはじめたが天堂一角、またひよいと気がついたように、

「どこぞ横穴へでもへばりついているようなことはあるまいな」

「いや、そんな隠れ場所はねえようだが……」

と答えながら、お十夜は後ろを眺めなおした。

しかし、なくはなかった。

よくよく闇に眼を馴らしていると、妙な所が一カ所ある。

どんづまりの真ツ暗な岩壁が、右側へ少し窪みくぼこんでいるらしい。その袋穴の漆うるしつぼ壺つぼみたいな狭い所に、人の眼らしいものがギラリと光っている。動かずに光っている。そして、孫兵衛を睨みつけている。

けれど、にわかになんかそれが人の眼だとは断定されない。なにしろそれ以外には何も見えないのである。で——孫兵衛は抜刀ぬきみを後ろ廻しにひそめたまま、屈身くっしんを伸ばして、ジツと自分の息を殺した。すると、向うの呼吸が感じられた。世阿弥はやはりそこにじつとしていたのだ。

一角は、孫兵衛の最初にいないといったのを信じて、気早に外

へ這い出していた。

「ふーん、すくみこんでいるな」と感づいたけれど、お十夜は、あえて助勢を呼ぼうとは思わない。

十年以上、日蔭干しになっている死にぞこない、そぼろ助広で一突きに抉るえぐくらいはなんの造作もないこと。そう思っている。

しかし暗い、どんな得物を持って、どう構えているか見当がつかない。窮きゆう鼠猫そねこを噛むということも一応思ってみる必要がある。ちよつと暗闇ひとみに眸ひとみが馴なれてこないうちは迂濶うかつに飛びかかれぬ氣もした。

すると不意に、岩壁の窪くぼみへじつとしたまま、目無魚めなしうおのごとく動かずにいた甲賀世阿弥が、

「おおう！ ……」と、不意に、太い息をもらして、さらにまた低く、

「オウ……」と驚いたような声を繰り返した。

この暗所に棲すみななれている世阿弥の眸は、自然生理的に、闇の中でも見とおしが利きく筈だが、お十夜には、皆目、対あいて手の見当がつかない。ただ、爛らんと射ふたる双つの眼を感じるばかりだ。

「狂いだすな、こいつア。よし、そのほうが始末がいい」と、かれは世阿弥が呻うめいたのを、恐怖のあまりだと思つて、爪を立てて来る猛獸を待つくらいな覚悟をもった。

だが、相手は身ゆるぎもしないで、

「そこへまいったのは、川島郷べこうに棲すんでいた原土、関屋孫兵衛に

相違ないと思うがどうだ」

といった。

「あつ……」孫兵衛は、ズバリと気構えを割られて、思わず、見えぬ闇にムダな目をみはった。

「世阿弥！ てめえはどうしておれの氏うじすじょう素姓を知っているのか」

「知っておるとも、知っているわけがあるのだ！ 孫兵衛、お前もよく思ひだしてみるがいい」

「思ひだせ……ウーム、不思議だなあ……何しろそちの面つらがまるで見えない」

「もう一昔も以前のことだから、こつちの顔が見えたにしろ、或いは思ひだされまい。わしも、わしを殺しに来た人間の前で、そ

んなことを思い浮かぶ筈はなかったが、フトお前の頭巾を見て思
いだされた、その、じゅうや頭巾を見て」

「な……なんだって……」

頭巾といわれて、孫兵衛の声は意気地なくみだれてきた。

外の光線で見たなら、面貌めんぼうまツ蒼さおに変わっていたかもしれぬ。

世阿弥には、ありありとその態さまが見て取れた。

「因縁だな……」

かれはこう嘆じた。

「お前がおれを殺しに来る……まさか川島にいたあの孫兵衛が、
わしを殺しに来ようとは……、ウウム面白い、冷ひややかに生死を超
えて人の世の流転を覗じれば、おれがお前に殺されるのも面白い」

「とすると、てめえはこの山牢へ捕まってくる前に、川島の村にも忍んでいたことがあるんだな」

「川島の郷さとはおろか、阿波の要所、探り廻らぬところはない。まだ誰に話したこともないが、徳島城の殿中にまで、わしの足跡がしる印してある。そして、一番永く身を隠していた家が、孫兵衛、お前とお前の母親とがふたり暮ぐらしで棲んでいた川島の丘のお前の屋敷だ」

「えっ！ お、おれの元の屋敷にいたって？」

「しかし、そうはいつでも、隠密の甲賀世阿弥を、みつめていたでは、いつまで、考えだされる筈がない。十一年前、わしは阿波へ入り込むと同時に、すぐにたみ畳屋みやに化けていたよ、紺の股ももひき引

にお城半纏しろぼんでんを着て、畳針のおかげで御普請ごふしんを幸いに、本丸にまで入り込んだものじゃ。そして、いたる所を畳屋の職人で歩いた末に、川島の郷さとで、元のお前の屋敷の畳代えにも雇われて行つた」「はて？ ……」孫兵衛には、まだ何を話されているのか思い当らない。ただしきりと気になるのは、世阿弥が頭巾の秘密を知っているらしい口ぶりである。

世阿弥は覚悟をしていた。死に直面しつつ話すのである。その態度は、姿に見えなくても、語韻ごいんに感じるので、お十夜も、殺すべく握っていた大刀を忘れかけた。

「——原士の屋敷はすべてだが、お前の屋敷も旧家でかなり広か

った。わしは畳代えの職人で、名前はかりに六蔵ぞうといつていた。

あの奥の十八畳の部屋、十二畳の客間、六畳の茶の間、十畳の書院」

孫兵衛は自分の旧屋敷の畳数を心でかぞえた。世阿弥のいうところ一畳の間違いもない。

「そして、玄関、女中部屋、仏間だな。話はその仏間から起こってくる。その古いお厨子は青漆塗せいしつぬりで玉虫貝たまむしがいの研とぎ出しであつたかと思う、その厨子の前へ、朝に夕に眉目みめのいやしくない老婆が、合掌する、不思議はない、御先祖を拝むのだ。ところがそこから不思議が生れた、わしが、畳代えの手をかけた日に、敷きつめの工合をなおす響きから、お厨子のそばの柱がポンと口を

開いた。ちょうど、平掌ひらてが楽に入るくらい、切り嵌はめになつてい
る埋木うめきがとれて落ちたのだ」

「ウーム、分つた」

「分つたらう」

「じやてめえは、それが縁になつて、半年ほど下男になつていた
あの六蔵か」

「そうだ、お前の母親は、それからぜひ屋敷にいてくれという、
わしも都合のいいことだ、隠密甲賀世阿弥は当分下男ということ
に早変りした。するとまもなくお前の母者ははじやひと人が重病にかかった。
うすうす事情を眺めていると、その当時、関屋孫兵衛というひと
り息子、博奕ばくちは打つ、女色によしよくにはふける、手のつけられない放ほ

うらつ
埒に、それが病のもとらしかった」

ガチャツと、何か金属的な音がしたので、世阿弥は突然言葉を切った。

すでに最前、合ねむ歡の木の^下で、鋭いやじり鑿にかすめられた時から、自分へも、俵たわら一八郎と同じ運命が訪れてきたなど直覚して、覚悟はきめているか**れ**だ**つ**たが、話し半ばに、劍の音を聞くと、やはりぎよつとして舌が吊つりあ**が**つた。

見ると——世阿弥の眼で見ると——お十夜は大刀をつか**ん**でいる手をにわか**に**、バツタリと前へつ**い**たのであ**つ**た。その鏢つばの音だ**つ**た。

で、言葉を次ごうとすると、先に、岩穴を出た一角が、

「お十夜、何をいたしているのだ！」ととば口から奥へ言った。井戸へどなったように、その声がおそろしく大きく響く。

孫兵衛はハツとして、大刀を持ちなおした。

しかし、声に応じて世阿弥をすぐに突き殺す気は出なかった。

今の話は、多分な好奇心もあり、後に、阿波守の耳へ伝えている重要なこともあるが、何より、彼をたじろがせたのは、自分の母親のことを、世阿弥が話しかけているせいだ。

あらゆる放^{ほうらつ}埒、物盗り、辻斬りまでやって、なお恬^{てんぜん}然たる

悪行の甘さを夢みるお十夜だが、母を思う時、かれはもろい人間だった。不思議なくらい、その常識の一ツだけは、誰にも負けな
い善人孫兵衛であった。

もつとも、悪党の常として、お十夜も、母親のことなどは、おくびにも口に出していったことはない。よその母親が手を曳ひかれてゆくのを、後うしろからバツサリ斬るくらいな無情さは平気で持ちあわす男であつて、自分の女おんなおや親のこととなることから意気地のない特殊な愛情の持主だ。

が、孫兵衛は、身边の者や悪行あくぎよう仲間うなかまに、そんな微量びりような人情でもあることを気取られるのは、ひどく恥辱だと信じ、俱利伽くりから羅紋もんもん々の文身いれずみに急所が一カ所彫り落ちているような考えで、努めてまる彫ほりの悪人を氣どつていた。

後あとにも前さきにも、たつた一度、何に感じてか、その彫落ほりおとしの氣持を口に洩はたごらしたというのが、木曾路へかかる旅籠はたごで、飯盛の女

を買った晩、周馬と一角に向つて、

「おれもさまざまな女に逢つたが、いつまでも好きな女は、やはり、おふくろという女ひとりだ」

と、冗談まじりにいつたくらいなもの。

今度七、八年ぶりで阿波へ帰り、劍山へ来る途中、郷里の川島へ立ち寄つたかれが、こつそりと、屋敷裏の丸い墓石と逢つてきたことも、誰も知らない事実である。

で、孫兵衛は、たじろいだ。

世阿弥がまだ母親のことを何かいいそうなので、すぐに殺すのは惜しかった。

「おう！ 孫兵衛！」

一角がまたどなっている。

「おらんと見たら早く出てこい、手分けをして探さねばならぬ」
「待て」と、孫兵衛も奥から胴間声で、「ちよつと横穴を見つけたから念のためにあらためている」

「そうか、さてはそこだな」

「オイ、待て、入ってくるな」

「なぜ」

「怖ろしく狭そうだ。それより、ここはおれ一人でもいいから、ほかを探してくれ、いなかっただらすぐに出てゆく」

「ウム、じゃ入念に頼むぞ」

「ぬかるものか！ 周馬と三位卿は？」

「血眼でそこらをかき分けている」

一角の立ち去った足音を聞いて、孫兵衛はふたたび暗闇の眼へ問いかけた。

「だが世阿弥！ 初めにてめえは、おれの頭巾を見て思い浮かんだといったが、こいつア腑ふに落ちねえ。隠密から畳屋、畳屋から下男と、三段に化けてあの当時すましていた者にしろ、おれの頭巾の曰いわくを知っているはずはねえんだが」

世阿弥の眼と孫兵衛の影が向い合つて、洞窟の奥の不思議な暗闇問答は、それからであつた。

「わしがお前の頭巾の秘密を知らないと思つているのか」

と世阿弥がいった。するとお十夜も、ふと、

「あの晩は、おれとおふくろ、あとは身寄りだけだった」と古い記憶をよび起こした。

「いかにも、わしは使いに出されていた、吉野川を越えて向う地へ」

「その間に……」とお十夜はゴツクと唾つばを飲む音を重苦しくさせて、「おれのおふくろは息を引き取ったのだ」

「世間の者は、不審とも気づかなかつたろうが、わしには読めた。なみの下男なら知らぬこと、かりにもだいたいふちよっけん大内府直遣の隠密、しかも棲み込んでいる家の中の出来事だ。その夜以来、孫兵衛、いつのまにかお前のその十夜頭巾が脱とれないものになっていたな」

「おう、ではあの時、使いに出て行つた後のことを？」

「いかにも、残らず見届けていた。お前の母が危篤というつと、すぐに七人の肉親ばかりが集まつた。そこは例の厨子ずしのある仏間、出入りに錠じょうをおろしあたりを見張り、そして、静かにお前の母の枕元をとり巻いた。……と、あの柱だな。切り嵌はめにして妙なものを埋め込んであるあの柱だ。それより前に、わしが畳を敷き代えた日に、埋木うめきの口が落ちた途端には、何か、燦然さんぜんとしたものを見たが、お前の母親が茶の間から飛んできて、妙にあわてて隠したものだ。その柱へ、臨終にのぞんでいるお前の病母は、枕つむりへ頭をのせたまま、弱い眸ひとみを向けたようだ。そうして、あれを……という意味を見せると、寂じやくとしていた七人の中から、ひとりが立

つてうやうやしく埋木をはずし……」

「ウーム……」

と、孫兵衛、頭の鉢をしんしんと締めつけられるように呻うめいて、

「もういい！　話は止めろ」

突然、対あいて手の声を打ち消した。

「世阿弥、おれはてめえを殺さなければやならない。分っているだ
ろうな」

「うむ」 自じじゃく若として、

「この春、俵一八郎が殺やられているから、わしにもやがてやつて
くるだろうと思っていたところ、観念はしている。だがの、孫兵
衛、もう少し話してもいいじゃないか」

「つまらねえ」

「いや、ゆえつ愉悦だ、わしは話したい」

「おれはてめえを殺そうとしているのだ。殺されるこの孫兵衛と話をするのが、愉悦だというばかはあるめえ」

「この身を殺す敵でも悪人でも、こうして、世間の人間と口をきくのはわしにとると言いようのない珍しさだからな、まアゆるしてくれ、そこで今の話だが……」と、世阿弥は低いこわね声音で、平調な言葉を自然につづける。

「——臨終の間際に、あれをと、お前の母親が、柱の隠し穴から取りださせたものを、細いろうさいく蠟細工みたいな手にふるえながら持った。白蛇はくじゃの喉のどをおさえるようにつかんでいた。そうして、し

ばらく口のうちに、経文のようなことを唱となえていた」

「で、世阿弥、それをてめえは、いつたいどこで見ていたのだ」

「——使いに出ると見せかけて、わしは天井裏に潜ひそんでいた、甲

賀流の忍法、塵ちりも落しはしない筈だ。そこで息を殺していると、

病人の指の間に小蛇の首みたいな形のもものが、弱い灯明あかりにもさん

らんとしている。と七人の肉親の者たち、みんなシーンと後ずさ

りをし、顔を上げる者はなかった。ああいう時には原士という者

も、みな怖ろしく森厳だ、儀礼みだれず古武士のよう、ことにそ

の晩の七人は、川島郷せうの原士の中でも、また特別な密盟組みつめいぐみらし

い、切ツても切れない因縁の仲間だ」

「やめろ、どこまで聞いてもくだらねえ、もうそんな思い出話な

んざア聞きたくもない」

「わしにも、少し謎が残っている、まあ今しばらく聞くがいい」

「止めろというのに、くどい奴だ！ サ、殺ばらしにかかるぞ」

「耳に飽あきたらその時に、黙って、突くとも斬るともするがよい。

世阿弥はここにかがまったきり、とても、逃げる体力はないのだから。——でお前の母親だ、その時、絶え絶えな息づかいで、前に涙ぐましい意見をいったな、後ごし生しょうだと、わが子に手を合せ、改心を迫ったな。だのに孫兵衛、そちは邪悪の権化ごんげのように、一生悪事はやめられぬと答えた」

「当りめえだ、死んでゆくお袋に嘘がいえるか」

「それはいい、悪党の率直もいいが」

「チツ！」と、舌打ちして「おふくろの幽霊みたいに、おれにいつたい何を説とこうつていうんだ」

「十夜頭巾——」

と、世阿弥は暗黒の中で笑った。

「頭巾の悩みとでも申そうか」

孫兵衛は口をつぐんだ。

暗闇の中の二ツの目はジイと白く真向きにすわったまま、

「——お前が改心はできぬといいきると、お前の母、死にきれぬもだ悶えを見せ、サメザメと泣いて、孫兵衛よと呼んだ。孫兵衛よとまた呼んだ。お前は立たない、あの時の女親は怖かったのであろ

う、で、病人は三度目に、お祖父様じいさま、どうぞ、孫兵衛をこれへ、と側にいる老人へ眼で哀願した。名は知らぬが白髯はくぜんの老武士、あとで聞けば、川島郷の原士の長おさで、ひとたび、その老人に、あいつと杖を向けられた者は、たとえ、どう他国へ逃げ隠れしても、必ず手を廻して殺されるという、怖ろしい支権者しけんしゃであるそうな」

高木龍耳軒たかぎりゆうじけんのことをいうのだなと孫兵衛には分った。

それや龍耳りゆうじ老人は怖ろしいにきまつている。原士の長おさはあの人だから治まっているといわれているくらいなものだ。仲間の脱走者で、長崎の果てまで逃げたやつがあるが、老人はいながらにして、その男の首を見た。

孫兵衛も故あって、他国へ出ていても、絶えず龍耳りゆうじ老人の監

視をうけている身だから、すぐに頭脳あたまへピーンときた。

世阿弥はまた話しつづける。

「お祖父様じいと病人が頼むと、その老人が、黙ってお前の襟がみをつかみスルスルと母親の枕元へ引きずってきた。と——お前の母の細い腕は、お前の首を強く巻いて、夜具の下へ押しつけた。その片手には、柱の隠し穴から取り出したさんらんたるものをつかんでいる。アツ、お前は悲鳴をあげて四肢しを突つ張る、同時に母は息をひきとりそうになった。ぎよツとしたが、周囲の者も、見ているよりほかなかつたらしい、白い蒲団ふとんは血で染まった」

しばらく言葉を切っていたが、孫兵衛は、刻一刻と、世阿弥を突く機を逃がしていた。

「——まさに絶えなんとする息の下で、お前の母は、原士の長のおさ老武士へ頼んだ。——孫兵衛が改心するまで月代さかやきをのぼすことはなりません。孫兵衛めに私のお祈りが要らなくなるまで、遺物かたみに与えた頭つむりのものをとることもなりません。この遺言を破った時は、お祖父様じい、川島郷七族のため、どうか、お情けに孫兵衛を殺してやって下さいませ。でなければ一生このまま日蔭者にしてやっておいて下さいませ。子が可愛いからです。ほかの七人方も、お頼みいたします。こういつて最期の眼を閉じた」

「……………」はッ、はッ、と、聞こえるような息をついて孫兵衛は無言。

「と——原士の長おさ、七人の肉親たちとともにしばらく黙禱もくとうをさ

さげ、死者の前で厳然とお前にいい渡した。孫兵衛聞けよ、その与えられた恩愛の秘密をみずからやぶる時は、貴様、たとえどこに逃亡潜伏しても、必ず、五十日の間に命を奪^とるぞよ！ と……」

ふと、落涙していたらしかつたが、お十夜孫兵衛、いきなり猛然と、大刀の鑢^{つば}ぶるいをさせて世阿弥の胸もとへ跳びかかった。

「ええ、果てしがねえ！　ぐずぐずしちやいらねえんだ、片づけるから覚悟をしろ」

「待て、もう一言^{こと}」

「ちツ、未練を吐^ぬかすな」

「隠密根性といおうか、ここで、最期に一目見せて貰いたいものがある。わしも甲賀世阿弥だ、なんでこの期^ごに見苦しい死にざま

を望むものか。実をいうと、わしはその晩の有様を覗いた後から、お前のかぶり初めそた十夜頭巾の下に、おそろしい興味と執着を持った、隠密の執着だ。得心のゆくまで見届けなければ気がすまぬ。しかも、頭巾にくるまれたお前の秘密は、やはり一つの阿波の秘密だ。江戸城へはいい土産みやげ、それをつかんだなら阿波から足を抜こうと、一念に、お前の頭巾の中を狙っていた。と、お前は放ほうら埒つに荒すさんだ揚句、阿波を出しゅつ奔ぽんして行方をくらまし、わしは、原士おきの長に見破られて、とうとう、この剣山へ捕われの身となつてしまった。よくよくの因縁だ。そのお前が今日はわしの瘦せ首を斬りにきた。で、古いことを思い出したのじゃ……。しかし今、死の間際に、頼んであの時の秘密を見せて貰ったところで、何の

役にも立ちはしないが、わしが捕われの原因となった物だけに、山牢へきた後も、自分の眼が誤っていたか正しかったか、始終気になっていたところ、人にはわからぬ隱密煩悩ほんのう、死際しにぎわの欲望に、ありありと、手にのせて見て死にたい。孫兵衛、わしのいおうとする中心はここだ、ひと目でいい、見せてくれ」

「な、何をだ？」

「その頭巾の下に隠されているものを」

「ばかなことを吐ぬかせッ」

「嫌か」

「当たり前えだ！」

「じゃあ、話はそれまでのこと。殺やるか、いよいよ」

「おう、催促がなくなつても殺してやる」

伸びた猿臂えんぴ——

ムズと、甲賀世阿弥の襟もとをつかみ、右手めての大刀をギラリと後ろへひいた。

その刹那だった。

突然、洞窟の口元にあたつて、天堂一角がただならぬ絶叫と共に、地ひびきをさせてぶつ仆れ、山つなみでも来たように——。

「お十夜ツ、早く手を貸せ、一大事だ！ 三位卿があぶない、周馬もツ」

「やツ、ど、どうしたつて!!」

「助じよけん劍しろ、早く！ 法月弦之丞とお綱が来たツ——、法月ツ

——うう……ム」

と、乱脈な声がすれ、すでに、そういう一角が、どこかへ一太刀浴びせつけられているらしかった。

ふた声ほど絶叫して、天堂一角は岩牢の外へ仆れてしまった。

孫兵衛は足もとの大地がめりこむような響きにうたれた。かれの眼は頭巾の蔭にあわてきつた輝きをうごかせた。そうして、思わずつかんでいた者の襟もとを離して、

「くそうツ！ 弦之丞などに」

と、洞窟の奥から走り出ようとしたが、また思いなおして、どうせのこと、世阿弥を殺してから行こうと、戻りかけると、世阿

弥は発作的に、突然、居どころから飛びあがった。

とがった肩骨がかれの胸を打った。上へ刀を振りかぶれる空間があれば、すえものぎ据物斬り、ただ一揮ふりに割りつけること、孫兵衛の手になんの苦もないことだろうが、見当のつかない暗闇。

胸もとへぶつかつたのを幸いに、孫兵衛は世阿弥の細いのだ首を左の腕へすくい込んだ。締めつけてひばら脾腹をひと突きに——と思つたが、そうたやすくもゆかなかつた。

甘んじて死をうけるようであつた甲賀世阿弥は、今の一瞬に、もの狂わしく變つて、

「わしは死なぬ！ わしはまだ死なぬ！」

となひ力をふりしほり、孫兵衛の腕から逃のがれようともがいた。

「じたばたするなッ」

「むむむッ、一刻ときちがいッ……」

滅めつぜん前ぜんの一燦さん、おそろしい念ねんりき力りきで対手あいての腕うでくびへ歯を立てる。

白い刃は、世阿弥のわき腹に当てがわれていた。

かれの前歯が孫兵衛の肉へ入ってゆく力は、同時に抱かされた刃を食い入れる力となった。孫兵衛は腕くびの痛みをこらえつつしばらくソツとしておいた。

サーツと早い血汐が裾へ行つた。

「よかろう」

と、孫兵衛は思った。

強く刀をしごいて、平手で世阿弥の顔を押しすと、闇の中へドシ

ンと音をさせて、仰むけになった目と歯が白い。

グウツと、一度腹をつきあげた傷負は、

「一刻ちがいつ……」

とまたいった。

そうして、ビク、ビク、と大動脈から息を吐き出すように瘧けいれ

攣んする。

「とどめを」

と思つて孫兵衛が探りかけると、ふたたび洞窟の外で、お十夜、お十夜ツ、と三位卿と周馬の声が響いて、あわただしい足音の重なつてくるのを感じ、かれの手も心もますますうろたえたらしく、そのまま豹ひょうのごとく洞窟の外へ向つて駈けだしてきた。

頭の上から、明るい光線を浴びた途端に、孫兵衛はやわらかいものを蹴つて、もんどりを打ちそうによろけた。

蹴ころがされて、ウムと呻きながら立ち上がったのは、口元にこんとう昏倒していた一角で、正氣うめづいたが深傷ふかを負っている、左の肩先から袖半身、染めわけたような紅くれないである。

それにもぎよツとしたが。

外の有様を眺めるとともに、孫兵衛には天堂などを顧かえりみている余裕もなかった。法月弦之丞がそこから見下ろされる傾斜に立つて、周馬と三位卿を対手あいてに斬りむすんでいる！

がつさんりゅう月山流とやらなぎなた薙刀の型はやるが、初めて、白刃対白刃の

境に立った三位卿はしどろもどろだ。周馬とて腕にかけてはまこ

とに頼りがうすい。いわんや、法月弦之丞の前に立ってをや。

ふたりは、何か高声をあげあっているが、弦之丞の剣前に近づくことはなしえないで、走れば追ひ、追われれば逃げ、そして、息の間に、お十夜お十夜ツ、としきりに助けを呼びつづけている。なおかなたの柵さくと山際やまぎわとの境を越えて、ここへあせってくる武士の姿が見えた。

弦之丞とお綱とを追跡して、からくも駈けつけてきた海部かいふと徳島の役人、浅間、岡村、田宮の三同心。

その急なるを知り、またからまる二人をあしらいつつ、弦之丞は隙あるごとに、お綱へ向って叫びを投げた。しきりと手を振つて急せきたてた。

「お綱ッ」

「あい」

お綱もかれに添って働いていた。

「ここはかまわぬ、山牢の安否を！」

「あい」

「早くゆけ！ 世阿弥殿と名乗りをしてこい」

お綱は夢中で側を離れた。

洞窟の黒い口がもう真上に！

三、四十間ぐらいの距離しかない！

新藤五の柄つかを固く右の手に、片手で草の根をつかみながら、上へ上へ、洞窟の口へと、かの女じよは汗と涙の力をつづけた。

いちど立ち上がった天堂一角は、また合ねむ歡の木の下へ仆れてしまつた。何か声をかけたが、お十夜は返辞も与えないで洞窟の前から駈け下りている。

ドドドツと傾斜な地面を下りかけると、互いちがいに、向うのかんぼく灌木の間をかき分けて、懸命に登つてゆく白い影がある。

「や？」

と、急にそつちへ駈けだしてみると、振り向きもせず洞窟へ向つて行くのは、白い手てつこう甲きやはん脚絆をまとつたお綱であつた。

「おうツ、お綱」

お綱はその声をすら顧みていなかった。必死に上へあえいでい

た。

孫兵衛は幾百里の山河を越え、今ここまで会いにきたかの女の父世阿弥の血を塗ったばかりの刃やいばを持って、お綱のうしろへ追いかかった。かれは阿波へ来る前まで、ふたりの仲がどれほど密みつに深いものかを思つてみて、寝苦しい夜があつた。その後、あの暴あ風雨らしの夜の狂きょうらん瀾らんに、死んだものとのみ信じた後はさすがに煩ぼ悩んのうの霧が散つてせいせいとした気もちであつたので、今、お綱の姿を見ても、得ようとする念はなかつた、殺意のほうが強かつた。遂げえぬ悪魔の恋は、必然な、破れかぶれに變つたのである。殺さつとう刀もとの下に魂切たまぎらすことによつて、永い間の鬱うつえん怨えんを思い知らせてやろうとする。

追いつくと一緒に、孫兵衛、

「そこへはやらねえ」

と、背すじへのぞんで、助広の白光はっこうを一揮ふりなぎつけたが、崖に等しい傾斜であり、灌木の小枝に邪魔されて、行き方少し軽かったか、

「あッ」

と、横ざまに走った小脇差、女の力ではね返された。

「孫兵衛だね！」

「急いだところでムダだろう、甲賀世阿弥はたった今おれが殺ほらしてきたばかりだ。サ、次にはてめえの番」

「えーッ……じゃあ……」

山の根も揺るいだかと思うほど、仰ぎようてん天てんしてよろめいた身を、お綱はあやうく手で支ささえた。

「てめえにはまたさんざつぱらな怨うらみもある、なぶり斬りにしてやらなければ、このお十夜の虫が納まらねえ。お綱、覚えていたろうな」

かの女じよが、何か叫んだ声を割つて、サツと白い風がきた。上へと思つたが逃げきれず、後ろへかわした弾はずみにズズ——ツと七、八尺すべはちぢり落ちる。

孫兵衛の下りてくる足もとを、お綱は新藤五の切きツ尖さきで待つた。上の顔は嘲あざわら笑つて、構えをとりながら飛ぼうとする。

途端である。

「おのれッ！」と耳もとで。

はツと見ると、法月弦之丞、浅間、岡村の同心と、周馬、有村の四人を上へ上へとおびきよせて、それを捨てるが早いか、お十夜の方へ疾風しつぷうに來た。

迎えざるを得なかつた。孫兵衛はすばしこく刀を持ちかえた。

これは四人を束たばにしたよりもこたえがある。

すでに、ここまで一同が吊り上げられてくるうちに同心のひとり安井民右衛門が斬り伏せられていた。それと、最も頼むべき天堂一角が弦之丞の姿を見つけた真ツ先に、機先を制せられて一太刀浴びてしまったのは、なんといいてもはなはだしい力を失っていた。頼むは孫兵衛だけといつてもよい。

弦之丞はたえずお綱を見ていた。四人を対手あいてにしつつ、かの女の身边を開くように開くようにと防いでいた。

「あッ、間者牢へ」

お綱がそれに力を得て、洞窟の入口へ近づいたのを見た同心の浅間丈太郎は、こういつて敵の劍けんぜん前を離れ、上へ這おうとする
と、飛び寄った弦之丞の咬こうとう刀が、鋭く足をすくった。

丈太郎の体は雑木の茂っている所まで、一気に、俵のようにころげて行つた。

「寄りつくものは一太刀ひとたちに薙なぐぞ」

徐々と力の練りだされてきた弦之丞は、丈太郎を斬り落した弾力で、さらに上へ踏み登つた。

お綱はその後ろを風のようにすりぬけて、洞窟の中へ夢中で走りこんだ。

孫兵衛がああは言ったが、なお半信半疑であつた。殺したぞと
 いったことは、むしろ父がまだ生きている実証のようにさえ思えて、冥府よみのような冷たい闇へ飛びこむと一緒に、

「お父様——ッ」

と、叫ばんとした。

けれど、なぜか、幾百里をあえぎあえぎきて、この山牢まで達してみると、父娘おやこ名乗りをしないうちに、父とは呼びかけ難い気がして、のどをつまらせながら、

「——江戸からお綱がまいりました。甲賀世阿弥様！ 甲賀世阿

弥様！」

と、固い言葉で、続けざまに呼び立てて入ったが、深い闇は冷れいれい々となんの答えも与えない。奥のほうからガーンと返ってくるのは、おのれの口真似まねをする穴山彦あなやまびこ。

ふいに、お綱の足のくるぶしをつかんだ手がある。

洞窟の一番奥であった。

はつと、よろめいた弾はずみに、ヌラリとした岩苔いわごけに手をすべ込こませ
て、

「よ、世阿弥様!？」

何がなし、ぞつと毛穴をよだたせて、つかまれた足を抜こうと

すると、だらりと重い感じがそのままついてもち上がる。

と。

「ううウ……」

人の呻うめきだ、弱い、苦しそうな息……。

お綱は血を騒がせながら足元を探った——手ざわり？ ——
——
個の人体？ ——が、硬こわく横になっている。

わなわなした指先が、その冷たい顔から胸を撫でて行った。

骨ばった老人の四肢し、誰？ と疑ってみるまでもなくお綱はつ
づけざまに名を呼んで、腕の中へ抱きあげた。

夢中で、よろばうように、洞窟を後へ戻りだした。だが、口元
の明りを見ると同時に、ギクと足をすくませてしまった。

「敵かたきは？」

外へ気を研とぎすまして、

「弦之丞様？」

と、その激しい乱らんじん刃を想像した。

ままよ！

必死な気もちでお綱は新藤五を構えながら、薄暮はくぼの白い明り目がけて走りだした！ と、その勢いの余りに鋭く、まっしぐらな姿は世阿弥の体と縊よれて、合歡ねむの木の根元まで泳いで仆れた。

あたりを見廻すと——いつのまにか、別の所のように変っている。

いちめんな霧だ。

ぼく
漠として山も樹木も見えない、ただ西の方に夕照の光だけが
ボツと虹色を立てている。

微小な水粒は、睫毛の先にギヤマンの玉のように光って、息
づまるような乳色の気流がムクムクとゆるい運動を描いてゆく。

どうしたろうか？ 弦之丞、そのほかの者の影も見当らない。
耳をすましたが、霧の中にも、それらしい叫びを聞かない。

お綱は身を起こすと一緒に、世阿弥の顔をむさぼるように見つ
めた。

世阿弥は目を開いていた。

深傷だ、眸は虚空にすわってうごかない、だが、何か言いたそ

うに、唇がかすかに歪む……。

お綱は、お十夜の一言を思いだした。そして、さすがに取り乱した。

「お綱です！ お綱でございますよ！ 分つて下さい、気を……
気をたしかにして下さい」

アア、と心をくじきかけては、また、

「お父さん！」

と、耳へ口をふるわせて、

「お綱ですよ——ッ」

涙まじりの金切り声かなきになった。

「ウーツ……」と少し通じたらしい。世阿弥の手が、目の先の白い霧をつかむようにした。

「お……」

「分りますか！ 分りますか」

「……」

「お父さんッ」

「……」

ゴクリと喉のどの骨がうごいた。と、少し楽な呼吸がふツと洩れて、ニイとお綱を見て笑った。

「あなたの子のお綱です、江戸表から……あ、逢いにきました」
「ウ……ム」

「お千絵さんも、私のように、無事に向うで成人しております。
お分りになりますか、わ、わたしの顔が……わたしの……」

世阿弥はひとつうなずいた。

そして、ふところから例の血筆けっぴつの一帖じょうをとりだして、お綱の手へ持たせて、

「こ、これを」

とかすかにいった。

「え」

「江戸へ」

「ア……御遺書ごゆいしよ？」

「弦之丞の手へな」

「わかりました」

「と……」

「ハイ」

ぼろぼろと湯玉ゆだまのような涙が走る。お綱は拭こうともしないで、

「ハ、ハイ……」と声を曇らせた。

「折があつたら……関屋孫兵衛の」

「オ、下手人、きつと、仇を討たずにはおきません」

「いや……」

違っている！

と、いうように、世阿弥はかぶりを振ったが、その途端が——
もう最期だった。

「ず……頭巾の……」

と舌を巻くように言ったきり。

「あつ、お父さん」

「……………」

水！

お綱は夢中で駈け下りた。

白い片袖に、流れの水を濡らして帰ってみると、もうまるで世阿弥の顔が変っていた。けれど、その死顔は満足していた。

だが、禍わざわいはまだあつた。

今、水をしめしに行った留守に、世阿弥のそばへおいた大事な秘帖ひじょうが、わずかな間に失なくなっていた。

原士はらしの長おき

麓ふもとから仰げば、山の中腹を、一朵だの白雲が通っているのである。
う。

その霧が過ぎぬうちは山牢の前から遠くを見渡すことはできないが、ふと気づくと、さして隔へだててもいない岩の間を、ひとりの男が這つてゆく。

そこに見えなくなった秘帖を、涙の目で探していたお綱は、霧をとおして怪しい男の影を認め、

「盗んで行つたな！」
と直覚した。

急いで、父の亡骸なきがらを洞窟の内へ隠し、向うへ這つてゆく男を

つけた。

駆けるかと思いのほか、男は、振り向いても、なお、這つていた。えんえん 奄々とした息で――。

近づいてみると、くつきよう 屈強な武士、しかし、肩にどつぷり朱をあけ にじませている。

最前、お十夜が走りだした時、足にかけられて、草の根に呻いうめ ていた天堂一角だった。かれには、深傷ふかでながら、まだ這うだけの気力と意識があつた。

一角は、今の隙に、世阿弥のそばから血筆の秘帖をつかみとり、はッ、はッ、と荒い息づかいで這いだした。

同じように這いかがみ、足音をぬすんで、お綱は後ろへ寄つて

いった。

おのれ、おのれ、おのれ。

心のうちで叫びながら、一太刀にと狙い廻した。

一角は熊のように、岩から岩の上へ攀^よじてゆく。三位卿はどうしたろう？ 周馬はどうしたろう？ 声をあげて呼ぶ力はなし、

霧は深い。

颯^さツ——と不意。

風をつらぬいた白い条^{すじ}が、一角の後頭部へ消え込んだ。

お綱が斬っていった新^{しん}藤^{とう}五！

はずれても肩——或いは背すじへ切^きツ尖^さ下^さがり。

と思うと。

ズンと、刀だけ、岩へ深く、斜めに立ってしまった。

肩越しに腕をつかまれ、お綱は一角の前へ投げられている。どつちも死身しにみ、組むなり火のような息を争って、秘帖を奪とり返そうとする！ 渡すまいとする！ 組んではもつれ、伏せられては突っぱねる、一方は女、一方は傷負ておい、天堂勇ゆうなりといえどもなにしろ前からの痛手がある。お綱は江戸女の勝気とはいえ、やはり女だけの力である、力量公平に減殺げんさいされているのでいづれともいえない、秘帖を中心に双鷄そうけい羽毛を飛ばすありさまだ。

*

*

*

めつたにないことだ。

原士はらしの長龍おさりゆうじ耳老人みみろうじんが出かけるなんて稀有けうなことだ。

第一、吉野川の上流平和な地域にそんな事件がかつてないせいもあつたらうが、なにしろ、龍耳^{りゆうじ}老人^{らうじん}が出張^{でば}つてくるなんてまことに珍らしい。

ごう——ツと空が鳴っていた。

夕方、真つ白に隠された剣山は、夜になって、すっかり霽^はれていた。

「秋が近いな」

空の銀河を仰いで、老人は白い髯^{ひげ}の先をかじっている。

「山へ入ると秋の音が聞こえるよ」

誰も返辞のしてがない。

老人の前には松^{たいまつ}明^{あき}が二本、うしろには人影が四、五、黙々と

ついて歩いてくる。剣山の山路である。今日の夕方のすさまじい光景が目に残っている。そしてまだ、法月弦之丞が捕われていない。

あの死をきわめた颯さつ爽そうたる白びやく衣えの影が、いつ檜ひのきの蔭から、閃せん刃じんとともにおどり出さない限りもない。

老人のほかの者には、秋の音も銀河の壮麗もない様子、ザワというたびごとに、足の関節がはずれそうになる。

その中に伍ごしてきた、お十夜と旅川周馬さえ、龍耳老人の案内としてついているのだが、眼底に異様な緊張をただよわせ、まるで、仮面めんのように顔の筋をこわばらせていた。

「やあ、これは」

と龍耳^{りゆうじ}老人、杖を指してうしろの者へ、

「つまずくなよ、またここにも一人斬^やられている」

「は。明りを」

松明^{たいまつ}を呼び返して、供の原土が、死体を抱いてズルズルと後

戻りに、道のわきへ片寄せ、

「今の男は、木戸へ変事を報^しらせに来た、目明しの眼^{がん}八という者です」

と歩きながら告げた。

「目明しか」

杖をコツコツ運ばせながら、

「どうも十手を持った者で、終りのよかつたのはすくないようだ
な」

「ああ、また斬やられています」

と、松明が止まる。

「これで四、五人目だな、もう片づけるのは明日あしたにしよう」と死骸を廻つて歩きかけたが、ちよつと小腰をかがめて、

「ウム、なかなか立派やに斬やられている」

首を振つてテクテク登りだした。

山は追おい々おい深くなる。しかし、龍耳りゆうじ老人、壮者そうしやにまけない

足どりで、何かぶつぶつ言っていた。

「——法月のりづきげん弦之丞のじようとやら、たとえば夕雲せきうんの使い手にしろまさ

か天魔神てんましんでもあるまいに、遠巻きにするの山狩のと、いやはやぎようさん仰山千万だ。その上、この老人をわずらわすなどとはお話にならない沙汰……まあまあこんな事件は、蜂須賀家の御記録にもてい態よく省はぶいておくことだな」

耳が痛いのは孫兵衛だ。

周馬は黙ってついて歩いた。昼の元気もどこへか、少しも意気があがらない。

——洞窟の前で、弦之丞を取りかこんだ時、三位卿と周馬がもう少し腰を入れこめば、自分の力でも、きつとどうにかしたものを。と、お十夜は、今もそのいまいましさが胸に消えない。

眼八が、ワツと原土をすぐってきた時には、もうどうにも手が

つけられなかつた。

霧が来たのも悪かつた。

弦之丞はそれに乗じて、存分に行動した。眼八も斬やられ、原土の中にも沢山な傷負ておいが出た。霧がはれた頃には、夜になって、姿を探すよすがもない。

こうなると、地理は彼に利で衆には不利。ひとまず山番小屋の評議となり、異論まちまちという所へ、ひよっこり来あわせた龍り耳ゆうじ老人が、耳を掘りながら聞いていて、

「これよ、若いのが、劍山は渭城いじょうのお庭より少し広いぜ」と笑つた。

山狩評議を諷ふうしたのである。

「どれ、おつくうだが行つてみてやろうか」

深夜にかけて押し出した。

といったところで、人数は六人、それも途中で返す約束の案内に過ぎない。ただし、三位卿は賢く同行をはずした。おそらく老人の前ではわがままがふるまえぬからであろう。

「だいぶ来たな、ウム」

「俱利伽羅坂くりからざかでございます」

「ちよつとくたびれたよ。やはり、年は年だな」

「吾々でさえ、この通りな汗ですから」

「おいよ」

「はい」

「ご苦勞だが後ろへ廻うしつてくれ」

「はっ」

「松たいまつ明はわしが持つてやる。腰を押せ、腰を」

供の原士がうしろへ廻つて老人の腰へ手を当てがう。高野こうやの尻押しの故智こちに習つて、老人は樂そうに押されてゆく。

そうして、山牢もだいぶ近づいてきた。ふと仰ぐと、削りけず立つたような絶壁が前にあつた。

「おう、この上だな、間者牢は」

「さようで」

と、孫兵衛が応じて――

「ここはちようど、あの山の背にあたっています」

「どこかで水音が高くするな」

「しばらくゆくと流れがあり、それに沿って十町あまり登りつめます。するとやがて間者牢の柵さくが見えるはずで」

「そうか」と、老人は杖を止めた。

「——ご苦労だった、これから先はひとりでもよろしい、お前たちは帰ってくれ」

「しかし、もう少々先まで」

「懸念けねんには及ばんよ」

「危ぶむわけではございませんが、お差しつかえなければ、せめて、弦之丞の姿を見つけるまでも」

「いや、かえって邪魔だよ」

手を振つて、独り先へ歩きだしたが、一、二丁足を進めるごとに、杖を立て、間者牢の山をふり仰いでいた。

老人のうしろ影を見送つて、旅川周馬は、

「なるほど剛腹ごうふくなおじいさんだ」

と、舌をまいて、

「なあお十夜」

「ウム？」

「深夜しかもこの深岳しんがくだ、弦之丞のやつは山にこもつて、血に狂したやぶれかぶれ、人と見たら盲目もうもく目に斬りつけるだろう。とても、吾々にもあんな勇氣はないよ」

「そうさ、困った老人だて……」

何が困るのか、孫兵衛の返辞はすこし意味をちがえて、

「あの分じや、どうも当分は死にそうもねえ」

と、頭中の重さをふと気にしていた。

そんなことをいって、ただひとり間者牢へのぼって行つた影が、
うすい夜霧にボケるまで、一同見送つてはいたが、誰も、

「あの老人が、ちがたな血刀を下げたびやくえ白衣の影にピッタリ行き会つた

らどうする気だろう？」

とは心配をしていない。

りゆうじ龍耳老人の胸には何か、しかとした方寸ほうすんがたたみこまれて

いるものと信じて、少しも行く先に危惧きぐを感じていないようであ

った。

「ここに待っていてもしかたがあるまい」

龍耳老人の目を放れて、お十夜はすこしのんびりしたようなふうで、

「オイ周馬、三の木戸の番小屋まで行つて、明方まで藁わらぶとんでもかぶろうじやねえか。どうせ今夜でなくても、袋の鼠、片づくにや決まつている弦之丞だ、麓ふもとぐち口さえ縫いこんでおけば、何もあわてゐることはない」

松たいまつ明がとぼりきれたので、ふたりの原土は、スタスタ先へ下つてしまつた。

孫兵衛も踵くびすをめぐらして戻りかけたが、周馬の相あいづち槌づちがきこえ

ないので、ひよいとふりかえってみると姿が見えない。

「おい、どこへいったんだ！」

——奴、先へ行ってしまったのかしら？

気がついて、にわかに大股にあゆもうとすると突然、切ツ立てになった断崖の下で、

「孫兵衛！ 孫兵衛！」

と急せきこんで呼ぶ声がある。

「おう、周馬？ ——」

——闇をすかして、

「なにをしているんだ、そんな所で、先のやつは下ってしまった

ぜ」

「また、ここにも一ツ、死骸を見つけたのだ」

「ほうツておきねえ、どうせあした、麓のやつが片づけるだろう」

「だが……待てよ、少し……」

半身埋まるような雑草の中に立って、重そうに死骸を抱きあげているらしい。

「……あつ、天堂だ、やつぱり天堂一角だぞ、この死骸は」

「そんな所で絶息していたか」

「才、来てみたまえ」

かれが、弦之丞の第一刃をあびたのは知っていたが、日没、木戸へも集まらなかつたので、どうしたのかと思つていた際だ。

周馬とは江戸表以来、お十夜とは、ことに永い交際つきあいの仲。

かれはよく周馬やお十夜の安価な女色によしよくあさ漁りを軽蔑けいべつして、
 討幕きよの拳こぶしの成功を信じ、事なるにおよんでは、何万石を夢みてい
 た小なる光みつひで秀ひでみたい男だった。

悪友か善友かしらぬが、道中などでも、ふたりが痴話ちわに更ふけて
 いるまん中の部屋で、ひとり猪八ちよ戒かいみたい寝相をして、朝の鏡
 に目をこすり「わるい悪いたずら戯ざをしやあがる」と顔の墨汁すみをあら
 落して怒らぬところもあつた男だ。

まさか、捨ててはおけない。

「残念なことをした」

と、孫兵衛も飛んでいった。

「もう氷のようだ……」

悲壯な姿をして、周馬は、やっとのように死骸を前抱きにして、深い草むらを、ひと足ずつ跨またいでくる。

「この断崖から落ちたのだな……」

「高いな」

と、周馬もふりあおいで、

「じゃ、合図があつた時、傷手いたでながら飛びおりて、麓ふもとへ下ろうと

思つたのだろう」

「いや、自分で、こんな所から跳ぶはずはねえ。間者牢の山つづきだから、日が暮れて、うっかりすべり落ちたにちがいない。……

重いだらう、周馬」

「足がつかえて困る」

「よし、手を貸そう」と、孫兵衛は側へ寄って行ったが、あさましい姿をみると、衝たれたように立ちすくんだ。

周馬の抱き方がまずいので、乱びん蒼白の死者が、グタツと襟え骨ほねを尖とがらせて垂れている。

ひと言。

「オイ」と、声をかけてみたい気がした。

額ひたいへ手を入れて、孫兵衛、グーと無理にもちあげてみると、目をねむって、青あおろう蟻あむらうのような冷たい死顔、頬と耳のうらあたりに、爪でひツ搔いたような赤い筋……。と見ると――

口が裂けたように、白い前歯が何かくわえていた。

一帖じょうの血書！

いきなり、死首しにくびの齒から、孫兵衛がグツとそれを引ツたくつたので、周馬は重さにのめりながら、すばやく、白眼はくがんにお十夜の手もとを見つけて、

「オイ！ なんだ、今のはツ」

と死骸を下へ捨ててしまった。

一方。

龍耳りゆうじ老人は達者な足どりで、まないた岩の辺まで登つてきた。なんたる寂寞せきばくさであろう、無辺な天地だろう。

足もとの闇から黄泉よみの府にまで続いているのではないかと思われる。群山すべて低く白い曳迷えいめいは雲である。

仰ぐと。

けむりのような銀河をかすめて、星がひとつ流れた。老人は歩をとめて、しばらく、草のそよぎを聞きわけている。

じつと……

「？ ……」

行きくれた盲目めくらのように。

ありとも思えぬくらいな微風が、老人の姿にあつまってヒラヒラする。白い髯ひげ——骨ぐみのすいてみえる麻の両袖。刀は、鎧よろいとおしのような短いのを一本、前ざしでなく、わざと横へ。

……てく、てくとまたいつか歩きだしていた。

「ここだな」

間者牢の柵わきへ来ると、例の奔流がドーツと耳をうった。山牢の穴も柵の中も見えない。見えないが老人は、そこで、夕陽時の修羅のすざさを眼に描いた。

かれは、夜もすがらここを歩こうとするのか。歩いて夜の明けのを待とうとするのだろうか。

かくて、一刻半ばかりも、その辺にたたずんでいた。

何事もない。

強いて天地の変移をさがせば、霞のような星雲が消えて、特に大きな星がひとつ、西に目立っていたことである。

「はてな……?」

ピタ、ピタ、と夜露をふむ自分の足音を聞きながら――

「ひよつとして、自刃したかな、所詮しよせんのがれぬことは分つておるからな……だが、いや、自害はしまい。よく侍というやつ、都合のいい潮時にいさぎよくという言葉で、結尾けつびの責任をのがれるものだが、自身で命を絶つような弱腰では、最初から、ここへ入ってくる資格がない」

と……つぶやいてみると、かれの行くてに、いつか、薄いふたつの人影がうごいてくる。

はッ……と思うと、向うも足を止め、老人も歩みを止めた。ザザザと茅かやをなでてくる風が、うしろから押すように吹いて通つた。

しばらく、うかがいあっているうちに、ふたつの影のうち、ひ

とりは忽然と、岩の蔭か草むらの中へでも隠れてしまったらしく、やがて、近づいて来た様子のは、ひとりしか見えない。

龍耳老人も、のそ、のそ、と前へ足を運びだした。そして、双方の間、二、三間まで寄りあつた。

で、星明りでも、互いにその姿を明瞭に認めえた筈である。

ことに、先のは白衣なので、いつそう老人にははつきりと輪廓が見てとれた。その上、白い袖の端や裾に、点々と、血汐らしいものが滲んで見え、白木の杖をつかんでいる。

法月弦之丞であろう！

いち早く、弦之丞が隠したのはお綱という女にちがいない。

こう胸のうちで、龍耳老人、うなずいていた。

おれを何者と思っているだろう？ どういう態度でかかってくるだろう。抜き打ちにくるか、突いてくるか？ 老人はちよつとそんな興味を感じていたが、すぐにまた一步前へ出て、

「弦之丞、腰をおろせ」

と不意にいった。

錆さびのある老声だが、ヒツソリした大気にひびいて、いかにも雷ら喝いかつしたようだった。

そしてすぐに、先で安心するように、自分から岩の上へ、ゆつたりと腰をすえてみせた。

しかし、弦之丞は立っていた。

カチ、カチ、と燧鎌ひがまを磨すつて、首をかがめこんでいた老人の耳の裏から、香りのある煙がゆるく這つた。

「ちと、話がある」

吸いつけたその煙草を斜ななめに持つて――

「若者、まずそれへ、腰をおろしてはどうか」

と木の根を指した。

弦之丞は不審にたえぬように、

「何者？」

と見つめている風であつた。

しかし、血きに狂きようしているだろうなどといった周馬や孫兵衛の臆お

測くそくはあたっていない。

老人の目にも案外なくらい、そこに立った弦之丞は冷静であつた。むしろ、常のかれよりは沈鬱ちんうつな影さえ持つていて、みじん、心のさし迫つてゐる様子はなかつた。

——あれから、日没頃のひどい霧がはれて夜に入つた後。

かれとお綱とは、前の洞窟で落ちあつてゐた。

弦之丞はかの女の無事をまずよろこんだ。

けれど、お綱はあの際、とうとう傷負ておいの一角に死にもの狂いに振りほどかれて、絶壁の岩角いわかどから、大事な秘帖ひじょうとともに、かれの姿も見失つてしまつたので、悲嘆と絶望にくれて、世阿弥の亡骸なきがらにすがつてゐた。

血筆けつぴつの秘帖？ 世阿弥の遺書？

「江戸へ」

といったという、最期のさまを思いあわせてみても、それは必然に、大府へ届けよという、かれが鏤骨の隠密報告だな、ということとは弦之丞にすぐうなずけた。

「心配はない」

かれは、かれにすら自信のもてない言葉で、お綱を励まそうとしました。

「一角が絶壁から転落したものとすれば、当然、骨をくだいて落命している。夜が明けたら、道を探つて尋ねてみよう……」

そうはいったが、暁ぎょうてん天の光を見たなら、麓ふもとから孫兵衛や有村が、原土の新手あらてをすぐつて、ここへ襲よせてくることは分つてい

た。

といつて――

半生を無明むみょうの中に送つて、不遇な生涯をとじた甲賀世阿弥あんなたの
 なきから
 亡骸を、そのまま涙なく打ち捨てておく気にもなれない。暗
 澹たんたる洞窟、また悲惨ではあるが、隠密の霊壇れいだんとしては、む
 しろ、香華こうげの壇にまさるかもしれない。

ふたりは、半夜の黙侍もくじをした。そして、世阿弥の死骸を剣山の
 深くへ隠した。

「秘帖をさがし当てたとしても、それを携たずえて、どうして、この
 重囲を脱出することができるか？」

次の問題はそれであつた。

一難、また一難。

これには、さすがの弦之丞もわくのう感悩わくのうしている。

生きるはやすい。

この山に無為な生命をつづけようとするならば、やしま屋島の浦からいや祖谷へ落ちてきた平家の余族のように、それはいとやすいことに思える。しかし、麓の手配りを破る策は絶対でない。

それは、きょうまでの受難を、ひとまとめにしたよりはまだ難事だった。

山つづき、いや祖谷のかけはし棧橋をよじ越えて、土佐、さぬき讃岐の国境をうかがおうか。

それも至難。

第一お綱にたえられまい。

ふたたび海部路かいふじへ戻るは下策げさくである。

ただわずかに弦之丞の誘惑を感じるのは、最難関と思われる貞さ光口だみつぐちの木戸を斬り破つて、徳島の城下へまぎれこむ。——だが、劍は守るべく、頼るに絶対のものではない。

要するに、絶体絶命！ それが二人の足をのせている運命の石だ。

どう転落してゆくか？

天意だ、もういちど、明日あすの変化を待ってみよう。弦之丞はそこに意をすえて、星のうごきごきに夜明けの近いのを知った。

で——麓の木戸から新手あらたての声があがらぬうちにと、まだ真つ暗

であるが、天堂一角の死骸を断崖の下に探そうとして、お綱と一緒に来たところであつた。

そこで、龍耳^{りゆうじ}老人と行き会つた。

無論、油断もしないが、騒ぎもしない。弦之丞は、じつと、奇怪な老人を見つめていた。

「若者、腰をかけたらどうだ」

と、老人は煙草をくゆらしている。枯淡だが憎いくらい落ちつき払つた態度だ。

「まず、お訊ね申そう」

弦之丞もピツタリ前の岩へ腰をのせた。今はもう双方の顔の筋^{すじ}のうごきまで見て睨みあつた。

「ウム、問わっしやい」

さりげなくはいったが、老人の身ゆるぎに、キツと構えたところが見えた。

「そこもとはいずれの人か^{じん}」

「川島村、ほか七郷の原土の長^{おき}、高木龍耳軒と申すものじゃ」

「原土の長？ ……ウム、して、拙者に話があると申したが、何の用でここへまいった」

「問うまでもない！」

煙管^{きせる}を斜めにかまえて、龍耳老人、古武士のように豪放な口調、膝びらきになって胸を張った。

「おぬしを討ちにまいったのじゃ」

かれの熒けいとした眼は、やがて、弦之丞おもての面に、ゆるい微笑が彫られてくるのを見た。

——慮外である、と冷れい酬しゆうして答えざるように思われた。

老人は、そこで一だん声を張った。

「不敵な東方の間かんちよう 諜し！ もはやもがいてものがれぬところだ、岩を噛んで飢うるよりは、いさぎよく死をうけるツ」

そういつていながら、かれは、足もとへ火繩を置き、スパリスパリと煙草をくゆらしている。

弦之丞にも、これは、ちよツと不解な対手あいてであつた。本気か、威嚇いかくか、解げしかねていた。

「老人、拙者に話とிட்டのは、その儀か」

「いや、以上は要旨だ、今申したのは宣言だ。その前に、一言いつて聞かすことがある」

「才、聞こう」

「ここまで登ってくる途中でも、犠牲にえになった幾人もの斬口てぐちをみたが、汝、あたら天稟てんぴんの才腕をもつて、時勢の反抗児となり、幕府の走狗そうくになって、無為に終るのはつまらぬではないか」

「武士の心事しんじ、山家やまがのものにはわかるまい」

「ふうム……小賢こせいかしい。——王道を暗うし、民人に苛政かせいをしき、

徳川門もんよう葉ものおごりのほか何ものも知らぬ幕府の隠密となつて、

その小さなほこりをば、おぬし、俯仰ふぎようてんち天地にはじめ心事とする

か」

「だまれ」

かれの声も、勢い、やや激調をおびた。

「そちなどに、答える限りでない」

「逃げを張るな、弦之丞！」

「なにツ？」

「なんじ、燈火の恩を知って、太陽の恩を知らぬはずはあるまい」

「尊王の美しき仮面めんをかぶるな。禁門の御衰微ごすいびを売りものにして、

身を肥やそうとする曲者しれものの口癖」

「たとえ、仮面めんでもいい、偽善でもいい」

「恥じろ、その醜しゅうろう陋ろうな自分の本心を」

「皮と肉とをはいでは生きられない人間だ。どこまでこね返しても、表裏のない人間と世の中はつくれない。要は、今の混沌たる暗闇政道をただして、まことの天日を仰ぎたい。それは、万人の要望で、正しい声だ」

「いや、乱をのぞむ、戦賊の鳴り物、山家そだが、都へのし出ようとする方便に過ぎない」

「あれは木曾義仲きそよしなか、時代がちがう。ばかっているぞ、よく胸に手を当てて考えてみる、幕府が何ものだ！ あれは王廷おうていの番頭で、番頭でありながら、主家をないがしろにし、民税をくすね、巧妙な組織のもとに、十余代二百幾年、ていよく栄華をぬすんできた悪の府ではないか。——その妖雲にわずらわされて、月顔げつがんはれ

たまわぬは主上である」

「では訊ねるが、その徳川が仆れたなら何が代る？」

「王政がかわる」

「権をとつて廟びょうに立つものが、第二の幕府をつくりはせぬか」

老人、グツとつまつたが、強情に、

「いや、いったん王道の赫かくたる御政道がたてば、そういう虫ケラ

どもが業わざをする日蔭はない」

「迂遠うえんでござる、お考えがちがう」

「ともあれ」

「イヤ！」と押しかぶせて、

「——法月弦之丞は学徒ではござらぬ。また憂国の士でもござら

ん。弱い人間の微情にひかされ、武士という形づけられた意気地に押されて、ここに立った一個の放浪者——、世潮せちようを口にする資格はない」

「では、その情といい、意地というのは？」

「恋もある、泣かぬ涙もある。凡人弦之丞、愚痴はてんめんできざる。話すのも聞くのはわずらわしかろう。——意地といえは、

二百年來、江戸の禄ろくを食はんだ家に生まれた江戸の武士、このきずなをどうしよう！ いや、それはもう、清濁せいだくの時流を超え、世せ

潮ちようの向背こうはいをも超えてどうにもならない性格にまでなっている」

「ウーム……では、戦国に戻って天下は割れる、紛乱ぶんらんする」

「割れるでしょう、禁門方きんもんがた、徳川方」

「いったん、泥と血とがこね返って、新しい世が立てなおる、王政は古もとにかえる」

「しかし、易々いはいとは渡しもせず、うけ取れもせまい」

「なんの、大したことがあるものか」

「その偉業が成る前には、蜂須賀家ぐらいの大名、三家や四家は、狼火のろしがわりにケン飛ぶであろう」

「ウム」うなずくと見せて――

突然。

「こうかッ！」

と叫んだとたん、ズドン！ と不意に切った火ぶた。

翼つばさを搏うった鸞らんのように、飛びしきった龍耳りゆうじ老人の手には、黒

くたんえ
檀柄に 銀 鋏ぎんびようを打ったスペイン型の 短銃たんじゆう！ 真綿まわたのよう
なけむりを曳ひいて持たれている……。

「あッ……」と弦之丞。

仕込しこみの山杖、ヒユツと虚空へは抜けたが、 白衣びやくえは丹花たんかをちら
していた。

「……痛ウツ……つつつ……」と朱あけを片手に抱きしめながら、硝し
煙ようえんを離れた姿は、ドンと、仰むけに地ひびきをうった。

「やッ？」

かなたに隠れていたお綱は、自分の心臓を射ぬかれたように身
を弾はじいた。

弾たまけむりのうちに、弦之丞が仆れたのを見て、龍耳老人はほろりと手から短銃をとり落した。

いかにも疲れたらしい様子が、今になって、かれの呼吸にあらわれた。

「オ、夜が明けてきたな……」

空を仰いでいた老人は、すぐにうしろの崖がけぶち縁をのぞいて、

「次郎、まいつておるか」

と、誰かを呼んだ。

すると——思わぬ所から思わぬ人間の答えがあつて、そこへザワザワとわけ登つてくる男がある。影のように離れたことなく、じもく耳目となり手足となつて、老人の信頼あつい次郎とよぶ若者であ

った。

「まいつております」

と次郎、主人の前へ、墓がまのようにうづくまつた。

「……あれは？」

「これに持参いたしました」

肩からおろした具足櫃ぐそくびつを眼で示すと、老人は篤とくと見て、きげ

んよくうなずいた。

「弦之丞の仆れているそばへおいてゆけ。……ウム、よかろう、

その辺で」

かれは飄ひょう々ひょうと歩みかけた。弦之丞を射った得意や思うべし

である。五、六歩、何か微吟びぎんに謡うたいのひとふしを口ずさんでいた。

——声もかけぬ狂刃が、いきなり暁ぎょうあん闇あんからおどつたのはその時である。颯さつぜん然ぜんたる技ぎ力りよくはないが、必死！と感かんじられる小脇差の切きツ尖さきが、うしろから老人の鬢びんをかすつた。

ピシ——ッ！

白鬚はくぜん風になびいて、杖は横なぎにうなつた。

「ちイツ……」と齒がみを洩れる口惜しまぎれ。

「エエ、お、おのれ……」と、打たれてもやまず、狂わしくも、一念必死な女の影！

無論、お綱である。

血相、なんといおう、夜叉やしや、鬼女、なお言いたりない勢せいいであった。およそある場合の覚悟まはしていたものの、目のあたりまりに、

弦之丞が短銃の一弾に仆れたのを見たお綱が、こうなるのは当然であつた。

だが、あいて対手は龍耳老人、かなわぬまでもと、見返りお綱の捨て身に斬つてかかる刃は、やいば二度まで、三度までむなしく空を打たされて、なぶるがごとく後ろへよろけると、

「——汝もかッ」

と、かしゃく仮借なき杖はふたたび持ちなおされて、お綱の新藤五を一撃に叩きおとした。そして、なお身を跳ばしてかかるひばら脾腹をのぞんで、ウムと、左突きのこぶし拳がのびた。

とたんに、次郎はお綱のうしろから組みついていて、しかし、その必要はなかつた。もうなんの反抗もなく、まなじりを吊りあ

げたまま、お綱は次郎の腕にグウと反つて、だんだんにその力も四肢から抜けていった。

「……離せ」

老人が顎をすくうと、次郎は、手を放してうしろへ退いた。

お綱の体は、かれの足のほうへ仆れて、霧の中へ繭糸のよう
に捻れて寝た。

桔梗の花の芯から夜が白む。あたりの暁闇はひと風ごとに淡
くなくなった。無念をのんで目をふさいだお綱の顔へも、水のような
微光が這っている。

見ると。

その顔に、むぎんな涙の痕があった。

「……ぜひがなかつた」

龍耳老人はこうつぶやいて、鼻息をみるように、ちよつとお綱の唇くちのあたりへ手をやっていた。

そして、そのまま、次郎をうながして立ち上がった。

「間道かんどうからお帰りになりますか」

「いや、いや、昨夜の道から」

「では、こちらのほうを下くだります」

「おい、次郎よ」

「はい」

「お前だけは、間道から帰らなければいかん」

「あ、そうでした、では……」

目礼して次郎はスルスルと谷間たにあいへ入つてしまった。まるで、葉裏へかくれてゆく蜘蛛くものように。

見送つて、老人はさすががしい朝風を満腹に吸つた。そして、一顧こするとそのまま黙々と麓へ去つた……あとは、有明けを啼なく虫の声がひとしきり。

……ふと。

お綱は舌に苦い味を知つた。

冷やかな朝の冷気が、薄荷草はつかそうを噛むように口へ流れこんできた。

「お……」と意識づいて、身を起こした時に、一粒の気つけ葉が喉のどを通つたことを自身も知らない。

かの女は、手にふれた新藤五を拾いとして、仆れている弦之丞のそばへ、いざり寄った。暁の空の下に見た恋人の鮮麗な血は、お綱に美しい誘惑であつた。

嘆きとか、悲しみとかいうような、ふだんの感傷は起こらなかつた。むしろ微笑したいくらいな不思議な心の淵ふちに立っていた。

かの女は、今はじめて許されたように、男の顔へ頬ほずりした。頬と頬を重ねたまま、流るる涙を拭かなかつた。飽あかずに恋人を抱きしめた。

そして、自分の乳房を男の胸でお圧おされながら、袖にくるんだ新藤五の冷やかな切さツき尖さに見とれた。

白い襟くびを仰向かせる……。

喉のどへ！

突こうとすると——手が利きかない。いつか弦之丞の手が下から自分の腕くびを握にぎっている？ ……。

お綱はそれを錯覚さつかくではないかとあやしんだ。

けれど、弦之丞の手は、しかと自分の腕くびをつかんで離さない。待て——というらしく、喉のどへやろうとする刃やいばの手もとを握り止とめている。

龍耳りゆうじ老人の短銃にうたれて、弦之丞が一弾に絶命したものと

早合点したのは、旋風せんふうのような危機に吹かれて、何より先にお綱の心そのものが、平調を欠いてしまった証拠だった。

さすがに、お綱ほどの女も顛倒てんとうしていた、血が逆上あがっていた。

弦之丞の撃たれた箇所は、右胸部の上、腕のつけ根に寄った所で、一時、仆れたものの、急所ではなく、起たてない程の傷手いたでではなかった。かれは、その瞬間かすかながら、対手あいてがすぐと次に、止刀とどめを刺しに近づくであろうという意識をもって待っていた。

だが、老人は不解な行動に移っていた。弦之丞も傷口の出血を抑えきれず、霞かすみにぼかされてゆくように気が遠くなった。

お綱に胸を押されて、気がついた。ほとんど無我に、刀の手をつかんだのである。

弦之丞が目をみひらくと、お綱は何か大声で叫んで、夢中な手で扱帯しごきを裂き、朱あけになったかれの腕根をギリギリ巻きにする。

弦之丞はなすままになっていた。

しばらくして、やつと身を起こすと、まだらな血の痕あとに、草の
実みがいつぱいついた。かれの面おもては、まだ青白かったが、どこかに
気力の熱が燃えかえってくるようであつた。

と——そこに。

龍耳老人の残して行つた謎のような具足櫃ぐそくびつが、人の疑目ぎもくを待
つていた。お綱もあやしさにうたれて見つめあつた。

蓋ふたはすぐに開いた。

軽いものだった。

のぞいてみると、意外、中には二ツの天蓋と、二掛ふたかけの掛絡けらくと、
鼠ねずみ木綿もめんの小袖や手てっこう甲こうまでがふたり分？

いうまでもなく虚無僧の宗しゅうそう装そう、なんの意味でか、尺八までが添えてあつた。

いや、まだ解げせないものが、それに添えてある三衣えぶくろ袋ふくろの中にあつた。阿州あしゅう普化ふけ宗院しゅういん派僧はそうの印可いんかを焼やき印いんした往来手形である。それは、身をつつんで遁のがれろといわんばかりな品である。ふたりは唾然あぜんとして、対手あいての心を汲みかねた。

こうして、自分たちを徒勞に空手で江戸へ帰そうという心か？
ならば、止刀とどめを刺す機会があつた。またことに右腕のつけ根をえらんだ狙撃も腑ふに落ちない。

でなければ、わざと恩を売って、隱密方の執しゅうじやく着やくをにぶらそうとする策だろうか？

そう考えるのもあまりにうがち過ぎる。要するに老人の底意は不可解である。けれどまた弦之丞には、あいて対手の意志などはどうであらうとよかった。そんなことは眼前の道草だ。問題の末だ。

目的はまだ達しられていない。

世阿弥がお綱に託した隠密遺書はどうしたろう？ 一念、奪とり返さずにはおけないのはあの血筆の一帖じょうだ。あれをつかんで遺志をとげないうちは、命のある限り、闘わなければならぬ。

「お綱」

やがて弦之丞は、すっかりしたこわね声音で、かの女を見る目に愛熱の火をこめた。涙ぐましいくらいな情思をかくありありと彼が見せたことはなかった。

「お綱！ お前はどんな危地に迫ろうと、決して、この弦之丞より先に死んではならぬ。拙者には、何かしら靈れい感かんというような自信がある。きつと、あの秘帖は奪とり返してみせる。サ、今日はどこかへ姿を隠そう、この傷の血さえ少し止まれば……」

と、立ちかけたが、お綱がその膝に顔をうつ伏せて、泣いているのか、離れる様子がないので、また言いつづけた。

「よいか、お綱、拙者が秘帖をそちの手に返してやったら、お前はあれを持って江戸へ帰れ！ そこには、お千絵殿の幸福やら、甲賀家の榮はえやら、お前の亡き母の霊もまた、みんな、微笑をもつて待っていていよう。必ず、短気を出して、世阿弥殿の託たくにそむいてはならぬぞ。わしとて、そちが阿波をのがれる姿を見届けるまで、

必ずみずから死を招くことはいたさぬ」

この上にもお綱の意志を強めようとほとぼしる言葉のうちに、死を覚悟している弦之丞の心がほのめいた。

お綱は咽むせんで叫びたかった。

いいえ、弦之丞様！ わたしはあなたとこの国に死んでこそ幸福です。本望です。なんであなたを残して帰る江戸表にうれしい微笑ほほえみが待っていきましょう。

青空文庫情報

底本：「鳴門秘帖（三）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1989（平成元）年10月11日第1刷発行

2009（平成21）年2月2日第21刷発行

※副題は底本では、「剣山《つるぎさん》の巻」となっています。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2013年2月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

鳴門秘帖

剣山の巻

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 吉川英治
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>